

宗 像

武丸智真庵

宗像市文化財調査報告書

第 15 集

1988

宗 像 市 教 育 委 員 会

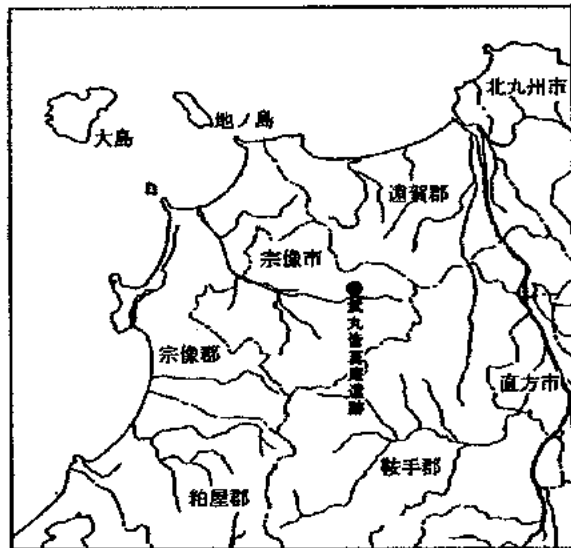


宗 像

武丸皆真庵

宗像市文化財調査報告書

第 15 集



1988

宗像市教育委員会

序 文

武丸皆真庵遺跡は、昭和62年度に実施された武丸地区内の土砂採取工事に伴い、緊急発掘調査された遺跡であり、今回報告書発刊のはこびとなりました。

武丸皆真庵遺跡で発見された遺構と遺物は、武丸地区における最初の古墳調査資料となるもので、他の地区についておこなわれた古墳調査資料と比較できる貴重な歴史資料となりました。

調査において出土したこれら多くの貴重な文化遺産は、古代むなかたの人達から継承されたものであり、十分な管理保存がなされ、将来、資料館等の施設において展示公開し、歴史的教材として活用継承していく所存であります。

最後に、本書に示された発掘調査及び整理に参加された方々や土地所有者の方々の理解と協力にたいしまして心から御礼申し上げます。

昭和 63 年 3 月 31 日

宗像市教育委員会

教育長 竹 原 瑛

例 言

1. 本書は、1987年度に国・県の補助を受けて実施した宗像市武丸皆真庵遺跡の文化財発掘調査報告である。
2. 当遺跡における調査は、古墳群として開始されたものであるが、調査進行に伴い、他の遺構も検出され、遺跡名が実状にそぐわない形となった。よって、武丸皆真庵古墳群を武丸皆真庵遺跡と改め、これを遺跡名とするものである。
3. 発掘調査は、宗像市教育委員会が事業主体となった。
4. 本書の中世遺物については、九州歴史資料館の森田 勉氏の助言を得た。
5. 本書使用の実測図及び製図の作製は、原 俊一、安部裕久、板橋皓世、清家直子、徳永映子が行った。
6. 本書使用の写真撮影は、原、安部が行った。
7. 本書図版の遺物番号は、挿図番号と一致する。(例17-3……………挿図第17図3)
8. 本書の執筆・編集は、安部が行った。

本文目次

第 1 章	序 説	本文頁
I.	はじめに	1
II.	位置と環境	2
III.	調査の概要	4
第 2 章	発掘調査の記録	
I.	古墳の調査	6
1.	第1号墳	6
2.	第2号墳	9
3.	第3号墳	20
4.	第4号墳	22
5.	第5号墳	22
II.	弥生時代の調査	23
III.	中世の調査	24
IV.	近世の調査	30
第 3 章	ま と め	32

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図 (1/25000)	3
第2図	武丸菅真庵遺跡遺構配置図 (1/2500)	5
第3図	武丸菅真庵遺跡発掘調査前地形測量図 (1/300)	7
第4図	武丸菅真庵遺跡発掘調査後地形測量図 (1/300)	8
第5図	武丸菅真庵遺跡第2号墳土器出土状況図 (1/50)	10
第6図	武丸菅真庵遺跡第2号墳俯瞰実測図 (1/40)	11
第7図	武丸菅真庵遺跡第2号墳主体部閉塞実測図 (1/40)	12
第8図	武丸菅真庵遺跡第2号墳主体部実測図 (1/40)	14・15
第9図	武丸菅真庵遺跡第2号墳出土遺物実測図Ⅰ (装身具2/3・鉄器1/2)	16
第10図	武丸菅真庵遺跡第2号墳出土遺物実測図Ⅱ (1/3)	18
第11図	武丸菅真庵遺跡第3号墳主体部実測図 (1/30)	20
第12図	武丸菅真庵遺跡第4号墳主体部実測図 (1/30)	21
第13図	武丸菅真庵遺跡第5号墳主体部実測図 (1/30)	22
第14図	武丸菅真庵遺跡弥生時代遺物実測図 (石器1/2・土器1/3)	23
第15図	武丸菅真庵遺跡中世墓出土遺物実測図Ⅰ (1/2)	24
第16図	武丸菅真庵遺跡中世墓出土遺物実測図Ⅱ (1/3)	26
第17図	武丸菅真庵遺跡中世墓出土遺物実測図Ⅲ (1/3)	28
第18図	武丸菅真庵遺跡近世木棺墓遺構実測図 (1/15)	29
第19図	武丸菅真庵遺跡近世木棺墓出土棺飾り実測図 (1/2)	30
第20図	武丸菅真庵遺跡近世木棺墓出土遺物実測図 (1/2)	30
第21図	武丸菅真庵遺跡平面プラン方眼図	32

図 版 目 次

図版 1	1. 武丸菅真庵遺跡調査前遠景	2. 武丸菅真庵遺跡調査前全景
図版 2	1. 第 1 号墳調査前全景	2. 第 1 号墳全景
図版 3	1. 第 2 号墳調査前全景	2. 第 2 号墳全景
図版 4	1. 第 2 号墳閉塞状況	2. 第 2 号墳閉塞状況
図版 5	1. 第 2 号墳石室奥壁	2. 第 2 号墳石室側壁
図版 6	1. 第 2 号墳石室正面観	2. 第 2 号墳石室内から玄門を望む
図版 7	1. 第 3 号墳主体部	2. 第 4 号墳主体部
図版 8	1. 第 5 号墳主体部	2. 近世木棺墓
図版 9	第 2 号墳出土遺物 I	
図版 10	第 2 号墳出土遺物 II	
図版 11	中世墓出土遺物 I	
図版 12	中世墓出土遺物 II	
図版 13	中世墓出土遺物 III	

付 表 目 次

表 1	武丸菅真庵遺跡 第 2 号墳出土遺物計測表 (装身具)	16
表 2	武丸菅真庵遺跡 第 2 号墳出土遺物計測表 (須惠器)	19
表 3	武丸菅真庵遺跡 中世墓出土遺物計測表 (杯)	27
表 4	武丸菅真庵遺跡 中世墓出土遺物計測表 (皿)	28

第1章 序 説

I. はじめに

宗像市は、福岡市・北九州市の中間に位置するという地理的条件を備えており、両市の通勤圏としての宅地化が急速に進んできた。これらの宅地化に伴い、人口が増加し、都市施設等の建設、取分け久原地区に建設中の総合市民センター等の建設も進んでいる。また、かつて純農村であった当市も、近代的な農業経営等により、都市近郊型の複合経営を目指した生産基盤の整備が進められている。このような大規模の開発の中で、土砂は、なくてはならないものである。特に、良質の山砂や赤土は、重要な資源である。

本年度の武丸皆真庵遺跡は、このような開発の波に押し流される形となったもので、遺跡の原状保存は、極めて困難な状況となり、記録保存という形で対処したものである。

本書は、1987年度の発掘調査について報告するものであり、次の組織で、発掘調査したものである。

組 織

総 括	宗像市教育委員会	教 育 長	竹原 瑛
		教 育 部 長	白木 国明
		社会教育課長	吉田 繁利
		社会教育係長	井上 弘
庶務・会計		主 事	大賀由美子
発掘調査		主任主査	酒井 仁夫
		主 事	原 俊一
		技 師	清水比呂之
		技 師	安部 裕久

なお、発掘調査において、土地所有者の増野正樹氏には、いろいろ便宜を計っていただき、感謝の意を表したい。また、発掘調査には、地元の方々をはじめ、福岡教育大学歴史研究部考古学班の学生諸氏に、参加・協力いただいた。ここに深く感謝いたしたい。

II. 位置と環境

武丸皆真庵遺跡は、福岡県宗像市大字武丸字皆真庵に所在する遺跡である。当遺跡は、宗像市と遠賀郡・鞍手郡の郡境にそびえる標高 267.4m を最高所とする戸田山から南西へと派生する舌状丘陵上にあり、標高約45mから55mの地点に占拠している。この丘陵は、『筑前國續風土記拾遺』第四卷にみえる真光寺の北側裏山にあたる。遺跡の現状は、山林と藪所であり、かなりの改変が加えられたようである。現水田は、丘陵の北西から西部に広がる谷水田を形成しており、この水田面と遺跡までの比高差は、約25m程（第2図）を測る。

当遺跡の北西方には、眼下に西流する久戸川を望み、これを挟む対岸の丘陵上には、当遺跡と対峙するかのよう^②に円墳が点在している。この丘陵の南西下端部、標高約33mの地点には、古墳時代の遺物散布地^③が広がっており、当古墳群及び周辺の諸古墳等との関連性が期待できよう。また、南西方を望めば、久戸川と合流して西流する本川があり、武丸・吉武両地区の穀倉地域である沃野を形成している。この沃野を挟んで、名残遺跡群の諸古墳群が、標高40m余の丘陵上に占拠している姿が遠望できる。このほか、当遺跡が位置する武丸地区には、6世紀後半の時期と推定される竪穴住居跡内に鍛冶炉が付設された遺構を検出した武丸高田遺跡^⑤、6世紀後半から末の時期に4本主柱穴を持つ方形プランの竪穴住居跡が、カマドを付設していることを明らかにした武丸小伏遺跡^⑥、8世紀後半から9世紀前半の時期と推定される軒先瓦のセットを軒先に飾り、総瓦葺きの荘厳な臺を並べたと思われる掘立柱建物跡を検出した武丸大上げ遺跡^⑦などが分布している（第1図）。

このように多くの遺跡が分布する武丸地区は、戸田山・新立山を背にし、西に開ける地域であり、この山々から派生した舌状丘陵とこれから湧き出た川などから得た沃野によって、その生活基盤としている。また、これらの地形を形づくる地質は、丘陵が花崗閃緑岩を主とする第三紀層からなっており、沃野は沖積層からなっている。このうち、花崗閃緑岩の第三紀層からは、良質の真砂土及び赤土を採取することができる。このため、多くの丘陵は、土取り工事等により、削られ、破壊され、その形を変えて行く憂目にあっている。これに伴い、各丘陵に分布している遺跡も破壊される憂目をみるのである。

註1 貝原益軒 『筑前國續風土記拾遺 第4巻 宗像郡下』

註2 福岡県教育委員会 『福岡県遺跡等分布地図（宗像郡編）330178・330179番』 1977年

註3 福岡県教育委員会 『福岡県遺跡等分布地図（宗像郡編）330176・330177番』 1977年

註4 弥生時代前期～中期にかけての袋状竪穴・住居跡・弥生時代中期～古墳時代の墳墓を検出。昭和58年より調査。

註5 宗像市教育委員会 『埋蔵文化財発掘調査報告書 第9集 武丸高田遺跡』 1985年

註6 宗像市教育委員会 『埋蔵文化財発掘調査報告書 第9集 武丸小伏遺跡』 1985年

註7 宗像市教育委員会 『埋蔵文化財発掘調査概報 第7集 武丸大上げ遺跡』 1984年



第1圖 周辺遺跡分布図 (1/25000)

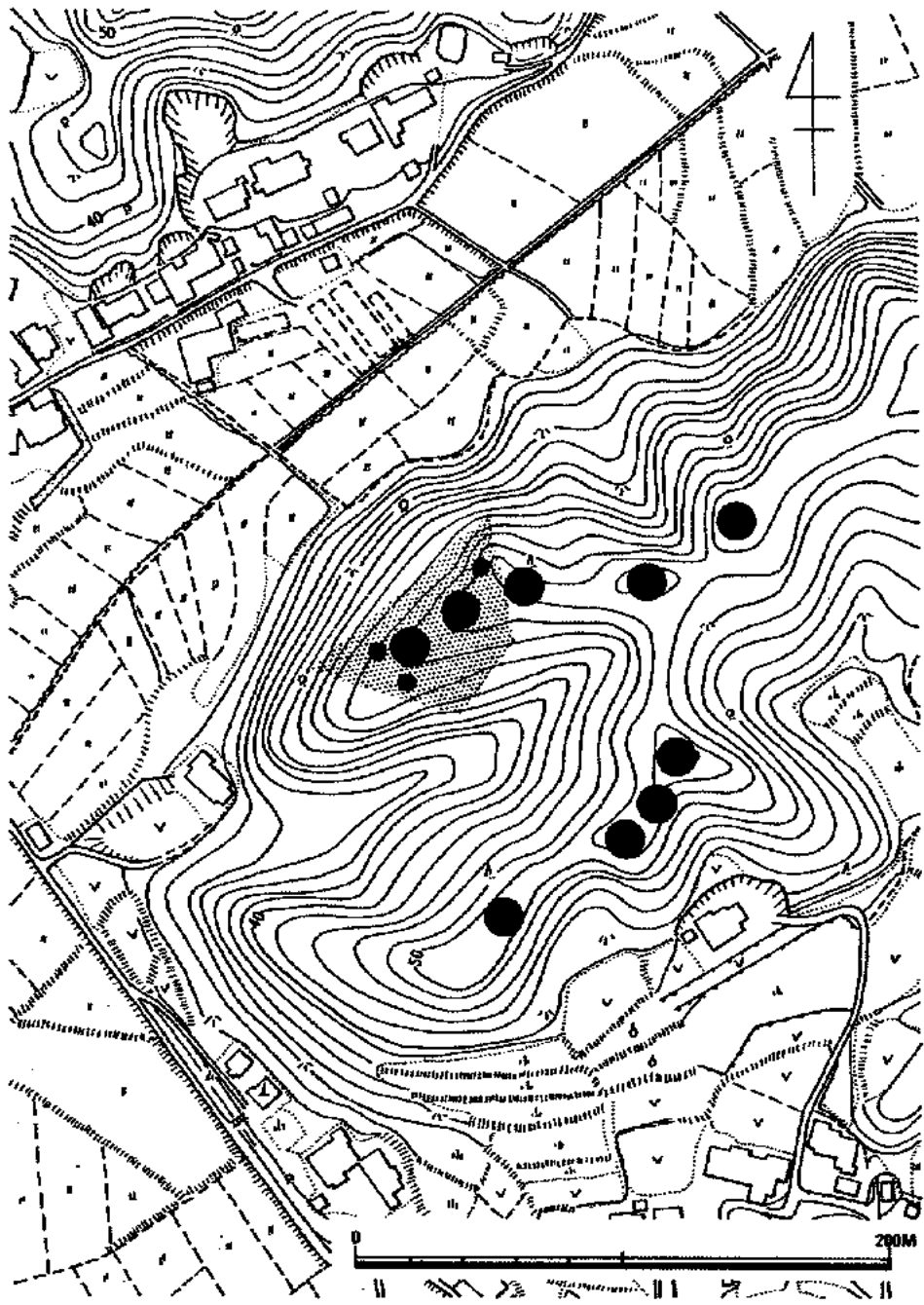
- | | | |
|------------|------------|------------|
| 1. 武丸皆真庵遺跡 | 2. 武丸大上戸遺跡 | 3. 武丸高田遺跡 |
| 4. 武丸小伏遺跡 | 5. 名残遺跡群 | 6. 吉留下惣原遺跡 |
| 7. 石丸遺跡 | 8. 陵殿寺宇土遺跡 | 9. 石丸原遺跡 |
| 10. 武丸町坂遺跡 | | |

Ⅲ. 調査の概要

武丸皆真庵遺跡は、土砂採取工事に伴う緊急発掘調査として、昭和62年6月8日、水準点の移設を皮切に、同年7月31日、第2号墳主体部実測終了までの約2ヶ月間に渡り、発掘調査を実施したものである。今回の調査は、2丘陵に跨って分布する武丸皆真庵遺跡のうち、工事によって、今年度中に破壊される北側丘陵上に分布する各古墳及び遺構について、記録保存するための調査である。

調査当初、当地は、土砂採取工事が、かなり進展しており、遺跡発見時の現況を著しく変貌させていた。丘陵上は、土砂採取の際に出る廃土で覆われている状況であり、また、丘陵上に分布する古墳は、墳頂部を大きく削られたり、墳丘の大半を失っている有様であった。

今回の調査は、上記のような状況下から、土砂採取工事と平行して実施されたものである。作業は、土砂採取工事の進展状況により、丘陵東側端と丘陵西側端に分布する円墳からとりかかった。東側のものを便宜上、第1号墳とし、西側のものを第2号墳として、後は随時番号を付した。丘陵東側の第1号墳は、墳頂部を大きく削られ、墳丘北側の大半を失っている。主体部は完全に破壊されており、墳丘調査において、墳形および規模を把握する作業に主眼をおいた調査であった。丘陵西側の第2号墳は、墳頂部の陥没坑から調査を進め、天井石を検出。これが3石、並列して遺存していることを確認し、陥没坑の調査から墓道検出の調査に変更。墓道を検出し、これを発掘。主体部入口の閉塞石を検出した。この後、閉塞石を除去。石室内の埋土除去作業となる。この際、大量の土器群を検出したが、並列している天井石の崩落等にみまわれ、遺構図および出土状況を記録できなかつた。たいへん遺憾に思う。この土器群が、中世墓に伴う共伴遺物であった。また、7月10日から重機による表土剥ぎ作業を開始。第2号墳の西側で、第3号墳・第4号墳を検出し、第1号墳の東側で、第5号墳を検出した。この後、第2号墳の墳丘を除去し、同墳の地山整形面検出時に、弥生式土器等を包む層を検出。また、同墳主体部の墓壇検出時に、近世木棺墓を検出した。これにより、当遺跡の調査は、弥生時代、古墳時代、中世、近世におよぶものとなった。また、これは、当遺跡が古墳造営のみを目的として利用されたものではなく、各時代に跨って利用された遺跡であることを確認したこと以上に、今後、当遺跡周辺に分布する多くの遺跡に対して、認識を改める良き参考資料となるものと思われる。



第2圖 武九岩真庵遺跡遺構配置圖 (1/2500)

第2章 発掘調査の記録

I. 古墳の調査

1. 第1号墳

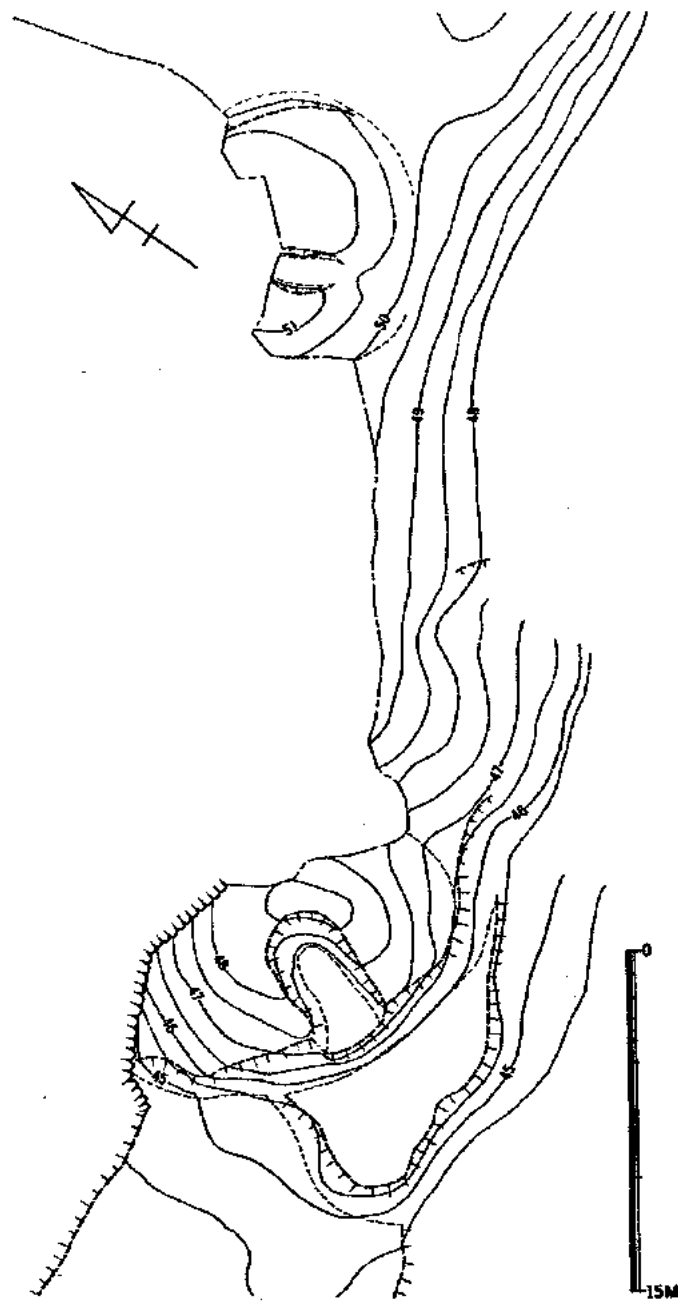
(1) 遺構

現状および配置(第3図) 当古墳は、調査区の東端に位置しており、丘陵尾根線上に乗っている。標高50.0mの等高線を基底部としており、標高51.482mを最高所としている。墳丘は、土砂採取工事によって墳頂部を大きく削り取られ、墳丘北側の大半(墳丘の1/2)を欠失したものであった。幸いに残った墳丘南側も、土砂採取時に出る廃土によって覆われた状況であった。

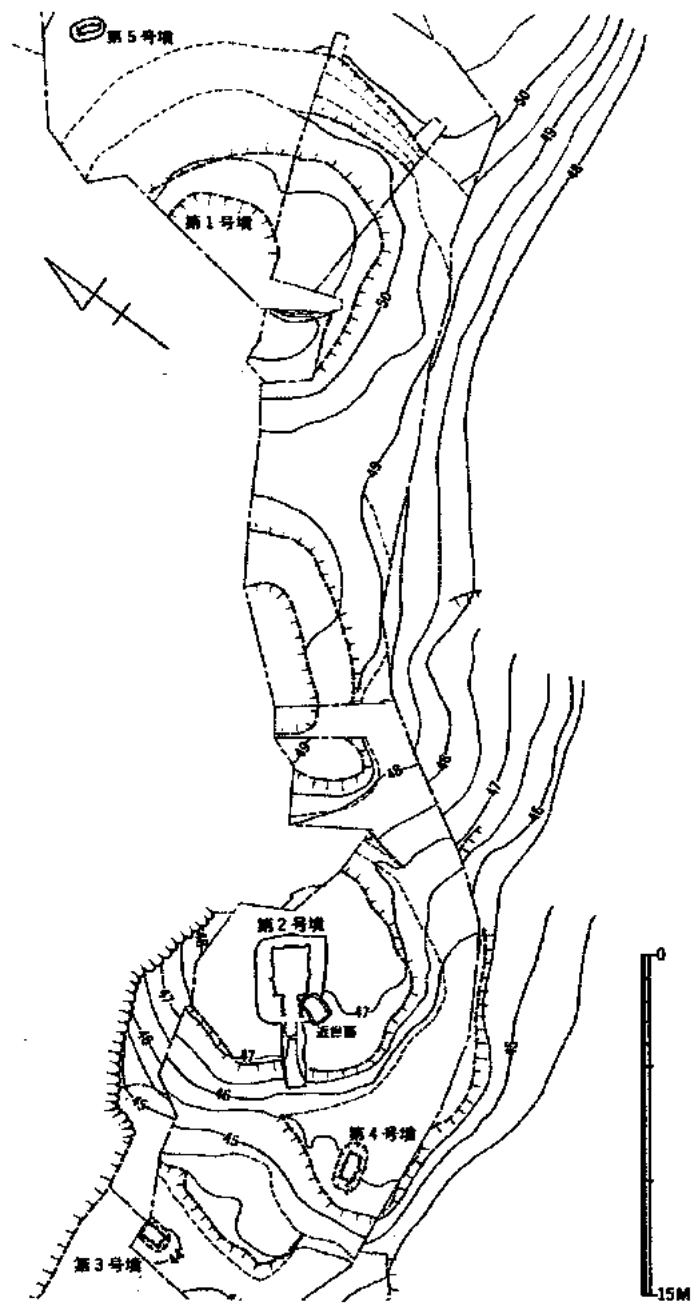
墳丘(第4図) 当古墳は、壊滅的な状況であるが、トレンチ調査によって、古墳の地山整形面と推定できるものを検出することができた。これによると、当古墳は、標高49.5mの等高線が巡る面に、径16m程の基底面をつくり出し、標高50.695mを最高所とする面に、径11mの水平面をつくり出している。この基底面と水平面の間には、1.2m程の比高差がある。丁度、下底径16m・上底径11m・高さ1.2mの円錐台形を成すもので、これが、地山整形であろうと推定できる。この地山整形水平面上から0.8m程の盛土が成されている。この盛土は、砂質の暗黄褐色を呈するもので、当地の地山(花崗閃緑岩を主とする第三紀層)を掘削して盛り上げたようなものである。また、この東側には、当古墳と丘陵を隔絶するように、幅2~3m程の弧状を呈する断面U字型の溝を掘削している。この溝の埋土は、粘質の黒褐色土を下層に、やや粘質な暗褐色土を上層に堆積させているものである。これらを考え合せて墳丘を推測すると、溝を含めて径20m程の円墳で、低墳丘のものと考えられる。また、主体部については、完全に消滅しており、不明ではあるが、墳丘が低いこと、周囲に古墳築造に使用された石材が散在しないことなど、主体部に石室を構築した可能性が少ないことを暗示していよう。

(2) 出土遺物

当古墳の地山整形面と推定される面の直上から、極めて器壁の薄い土師器破片を検出した。これらの土器は、極めて器壁が薄く、風化も著しいため、接合をおこなったが、器形を呈さず調整痕も不明で、当古墳の年代などを決定する資料とは成り難く、実測も不可能であった。



第3圖 武九皆真庵遺跡発掘調査前地形測量図 (1/300)



第4图 武丸若真庵遺跡発掘調査後地形測量図 (1/300)

2. 第2号墳

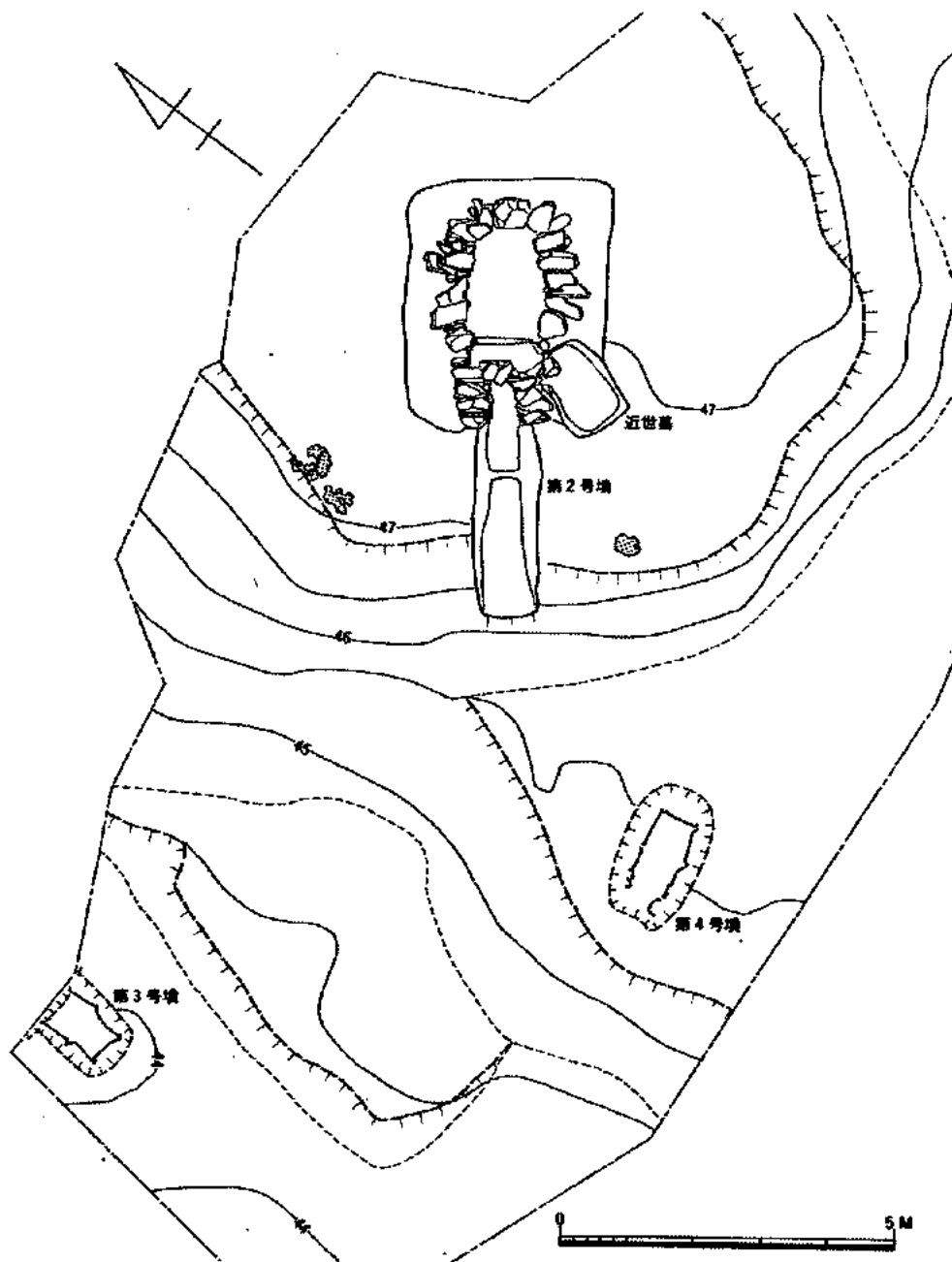
(1) 遺構

現状および配置（第3図） 当古墳は、調査区の西端に位置しており、丘陵尾根線上よりやや北西に偏している。標高46.0mの等高線を基底部としており、標高48.771mを最高所としている。墳丘は、土砂採取工事によって北側1/2程を欠失し、西側は土砂採取時に邪魔な木根などを取り除くために、大きく攪乱を受けた状況であった。また、墳頂部は、中・近世に墓所として利用されており、大きく陥没している。

墳丘（第3・5図） 当古墳は、標高46.0mの等高線が巡る面に、径12m程の基底面をつくり出し、標高47.323mを最高所とする面に、径9m程の水平面をつくり出している。この基底面と水平面の間には、1.3m程の比高差がある。丁度、下底径12m・上底径9m・高さ1.3mの円錐台形を成すもので、これが、地山整形面であろうと推定される。この地山整形水平面上から1.0m程の盛土が成されている。この盛土は、暗黄灰色の粘質土（古墳築造時における地表）上に20cm程の厚さで、墳丘の中心から3m程のところまで、墓壇と天井石を覆う赤褐色の砂質土を乗せている。次に、この天井石を覆った盛土と同じ高さになるよう、黄褐色の砂質土を10cm程の厚さで盛り、ほぼ水平な面を構築している。そして、この面を基底として、地山面から80cm程、砂質土と粘質土を交互に細かく積み上げている。最後に墳丘縁辺に山状の盛土を盛り、これを土手となして、厚さのある黄褐色土を雑に積み、封土としている。

墓壇（第6・8図） 当古墳の墓壇は、長軸3.8m・短軸3.0m・深さ1.8mを測る長方形を呈するものであり、短軸については、墓道が付設されている方向が、石室奥壁方向に比して、やや短くなっている。墓壇の底面は、長軸1.8m・短軸1.1mを測る長方形の高台を中央に残して、墓壇底面をさらに掘削した状態で、石室構築の際に、腰石が安定するような配慮がなされている。

石材および用法（第6・8図） 当古墳の石材は、ほとんどが堆積岩系統の変成岩で、当遺跡周辺で産するものではないようである。また、石材を構築する際の用法であるが、奥壁および両側壁の腰石には、長さ60～80cm程・幅40～60cm程の石材を使用し、墓壇の各壁面と石材長軸が平行な状態になるよう配慮して石材を立て、石室プランを形づくっている。両軸石は、門柱を立てるように、石材長軸を墓壇底面と直交させて、石材を立てている。これら、基底の石材となる上面に積まれる石材は、墓壇壁面と石材長軸が直交するように積み上げられている。この上に、長さ1.0～1.6m・幅60cm程の天井石が、石室長軸と石材長軸が直交するように架けられている。天井石について、俯瞰図には記されていないが、発掘調査当初、楣石上に2石の天井石が存在しており、石室の天井を覆うには、なお1石程を欠く状況で検出された。これ

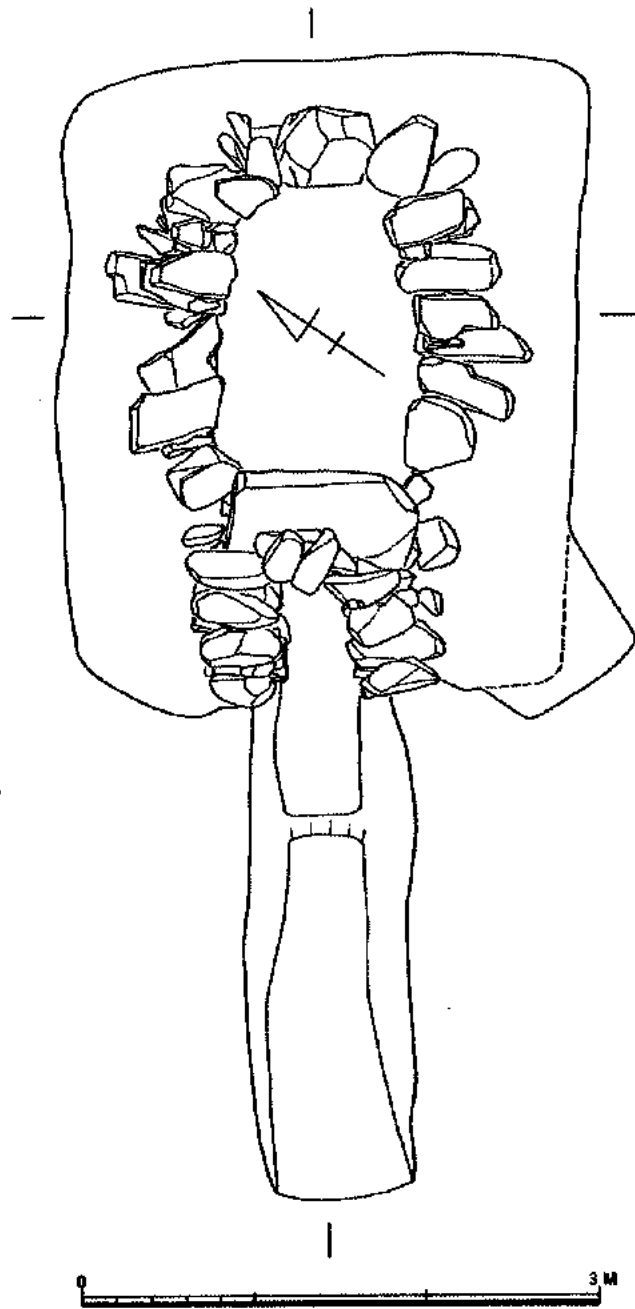


第5图 武丸皆真庵遺跡第2号墳土器出土状況图 (1/50)

から推測すると、当古墳の石室を覆う天井石は、3石程あったものと考えられる。

閉塞（第7図）

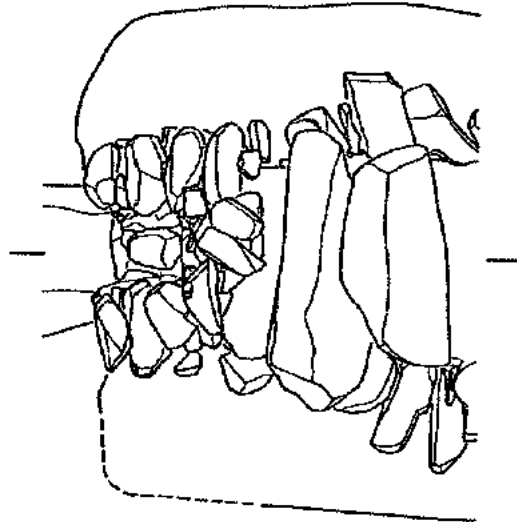
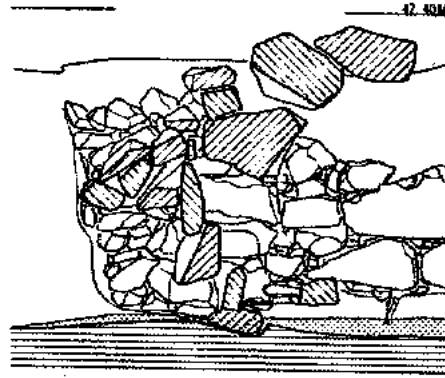
当古墳の閉塞は、石積みによるものである。石積みは、偏平で大振な石材および塊石状の石材によっておこなわれている。石積みの検出状況は、まず、楯石の上に1石、偏平で大振な石材を立てている。次に、この石材の前面に2石、墓道床面から20cm程浮いた状態で、偏平で大振な石材を縦に積み重ねて立て、玄門部を覆い隠している。これで覆えない隙間には、小振な塊石状の石材をつめ込んで、これを塞いでいる。その前面には、墓道床面から70cm程浮いたところから、楯石の上面を覆うように、塊石状の石材が、積み重なっている。これらの検出状況からみると、楯石の上面を覆うような塊石状の石材による石積みは、墓道床面からあまりに浮き過ぎている。また、偏平で大振な石材を積み重ねたものが、すぐ後に存在していることなどを



第6図 武丸皆真庵遺跡第2号墳附瞰実測図（1/40）

みると、この積み石は、閉塞に使用されたとみるよりはむしろ、両側の前庭脚壁上面の積み石が、自然崩壊して積み重なったものとみた方が自然のように思われる。一方、偏平で大板な石材を積み重ねたものであるが、細石の上に立てられた1石との間に食違いをみせている。しかし、前者の下面と後者の上面が、ほぼ同一の高さであることから、前者が、石室内に流入する土砂の圧力によって、前面に押し出されたものと考えられないだろうか。この可能性があるのであれば、この両者は、以前、縦に積み重なり、閉塞石として存在していたものと考えられる。このことから当初の閉塞状況を推測すると、当古墳の閉塞は、細石の上面から楣石の下面にかけて、3石の偏平で大板な石材により覆い、これによって覆えない隙間を、小板な塊石状の石材により塞いだ状況が考えられる。

墓道(第6図) 当古墳の墓道は、墓壇の短軸壁ほぼ中央から、墓壇長軸と平行するような状態で、南西に開口しており、丘陵端の方向へほぼ直線的にのびている。墓道の長さは、地山盤形面上で、2.9m、床面



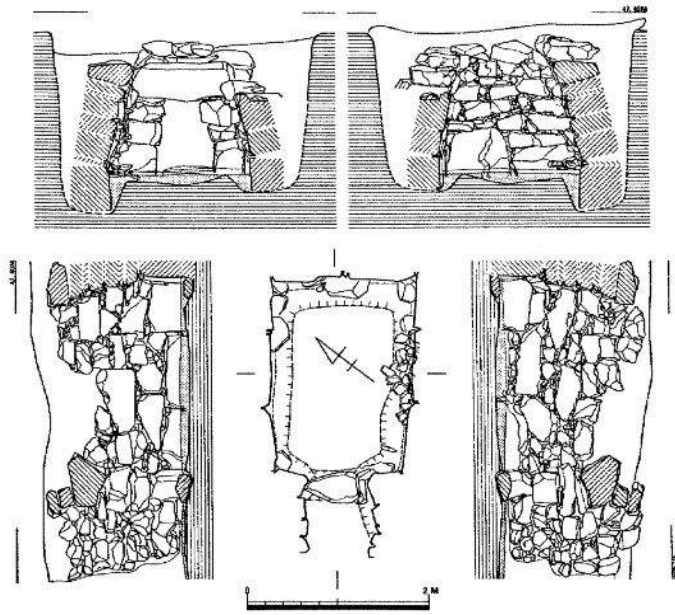
第7図 武丸皆真庵遺跡第2号墳主体部閉塞実測図(1/40)

で、3.2mを測る。また、幅は、地山整形面で、0.9m、床面で、最小値0.4m・最大値0.8mを測る。墓道横断面は、逆台形を呈し、地山整形面から、墓道床面最深部までは、1.4mを測る。墓道床面は、前庭側壁の最前列基礎石から1.0m程まで、ほぼ水平にのび、59度の傾きを持って、0.2m程高くなる。これから、10度程の傾きを持って、2.1m程のび、墓道端に至るものである。墓道床面最上高は、墓道端にあり、標高46m程を測る。この高さは、石室奥壁の腰石上面と同一レベルにあたる。また、この面は、石室構築の際に、石材を持ち送る最初の面となる。

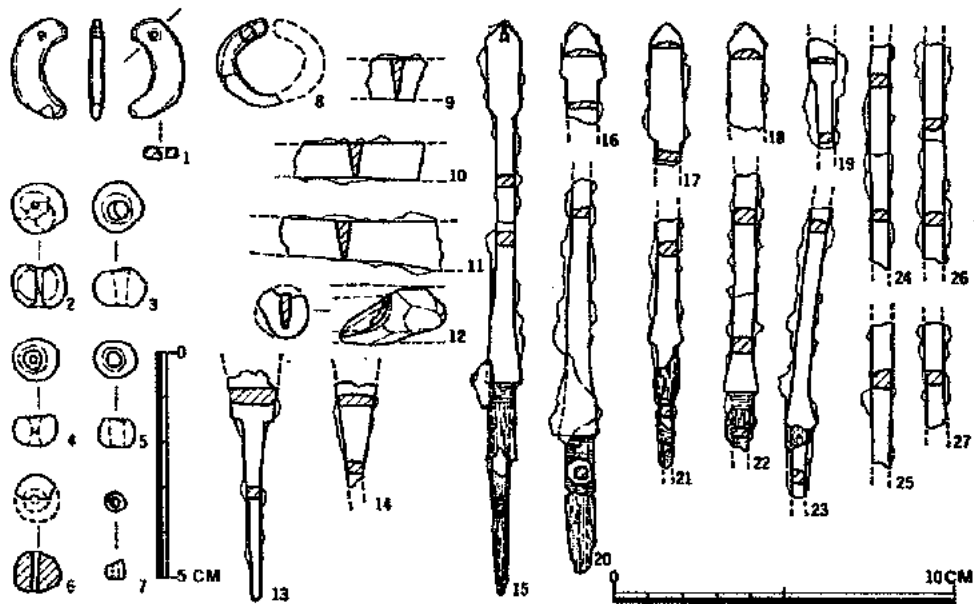
主体部(第8図) 当古墳の主体部は、主軸をN-55°-W方向にとる単室の横穴式石室である。この石室は、前庭、玄門、玄室の3部からなり、全長3.1mを測る。このうち前庭は、墓道から細石の前までで、上部に覆うものがない部位にあたる。床面は、墓道と続き地山を削り出したものである。両側には、南側4石、北側3石の塊石を基礎石として、この上部に7段程、雑な石組で塊石を積み上げて壁面を構築している。玄門は、玄室西壁のほぼ中央に位置し、玄室南北両側壁からそれぞれ0.3m程突出させたところに開口している。北壁3段、南壁4段の石組により門柱を形成し、これに掘石を架けて天井となす。また、前庭部床面よりさらに、0.3m×0.6m程掘りくぼめ、この中に1石を置いて細石となして床面としている。この立体構造は、断面が、上底0.4m・下底0.6m・高さ0.8mの台形状をなす。また、この法量は、長さ0.3m、幅0.6m、高さ0.8mを測る。玄室は、奥壁の長さより西壁の長さがやや狭くなる長方形の平面プランを呈する。その法量は、主軸方向で2.14m、奥壁1.6m、西壁1.4mを測る。また、玄室の立体構造は、その上部1/3程を欠失しているが、ドーム形を形成したものとと思われる。この構造は、奥壁に2石、両側壁に各3石の腰石を墓壇底に据えた各支石の上にそれぞれ安定させて配し、この上面に塊石を組み、上面の高さを整える。この上面のレベルは46.0mであり、これを基礎として塊石の持ち送り技法がとられる。現存状況では、6段の持ち送りがなされているが、当初、推定では9~10段程石組みを施したと思われる。この法量は、現存高1.5m、推定高2.1mを測る。

(2) 出土遺物

当古墳の玄室南壁中央に位置する床面からは、滑石製勾玉および鑿箭式の鉄鏃を検出した。また、玄室中央部からは、瑪瑙製丸玉およびガラス製丸玉を検出した。他の装身具および鉄製品については、玄室埋土中から検出したものである。当古墳出土の土器類については、2個体分の甕を墳丘地上整形面上で、他は、墓道埋土中から検出したものである。このうち、墳丘地山整形面上で検出した甕は破碎されており、この破片は、墓道により区切られた南側と北側に分散されて置かれていた。



第8图 武吉窑真陶俑第2号填主体形制图(1/40)



第9図 武丸皆真庵遺跡第2号墳出土遺物実測図1 (装身具2/3・鉄器1/2)

No	種類	材質	色調	長×径幅 (mm)	重量 (g)	穿孔 (形状)	No	種類	材質	色調	長×径幅 (mm)	重量 (g)	穿孔 (形状)
1	勾玉	滑石	緑(黄緑味)	22×3	1.3	片面	5	丸玉	ガラス	黒(緑味)	6×9	1.0	片
2	丸玉	瑪瑙	たいだい	10×12	1.6	両面	6	・	土	黒(黄味)	9×10	0.2	片
3	・	ガラス	緑	9×12	2.5	V	7	白玉	滑石	黒(黄緑味)	4×5	0.1	片面
4	・	・	黄 灰	6×10	1.4	X	8	耳環	鉄	—	(24×20)	1.3	—

表1 武丸皆真庵遺跡第2号墳出土遺物計測表 (装身具)

※ Noは、挿図第9図と同様のものである。

装身具 (第9図)

勾玉(1) 滑石製品であり、黄緑みをおびた銀色を呈す。長さ22mm、身幅3mmを測る扁平なもので、断面は薄い長方形である。穿孔は、片面穿孔で円錐形を呈す。重量は、1.3gを量る。

丸玉(2～6) 2は、瑪瑙製品であり、淡い赤みをおびた黄色を呈す。長さ10mm、径12

mmを測る。穿孔は、両側穿孔で円錐形頂部を重ね合せた形をとる。重量1.8gを量る。3～5は、ガラス製品である。色は、緑を基調とするが、腐蝕の遅速により緑色(3)、淡い黄灰色(4)、緑みをおびた銀色(5)を呈す。長さは、6mm～9mmのものがあり、径は、8mm～11mmを測るものがある。孔は、3種類あり、両側同径で同筒形のもの、円錐形のもの、円錐形の頂部を重ね合せたものである。重量は、3～5それぞれ、2.5g、1.4g、1.0gを量る。6は、土製品であり、紫色をおびた黒色を呈す。当品は1/2程を欠失しているが、長さ9mm、径10mmを測るものと思われる。孔は径1mmの円筒形である。現存重量0.2gを量る。

白玉(7) 滑石製品であり、黄緑みをおびた銀色を呈す。長さ4mm、径5mmを測る長方体である。穿孔は、片側穿孔であるが、孔は円筒形になる。孔径2mmを測る。重量0.1gを量る。

耳環(8) 鉄地芯の製品である。腐蝕が著しく、外装の用材はすべて剝落し、1/2程本体を欠失している。復元径24mmを測り、断面径は4mmの円形である。現存重量1.3gを量る。

鉄器(第9回)

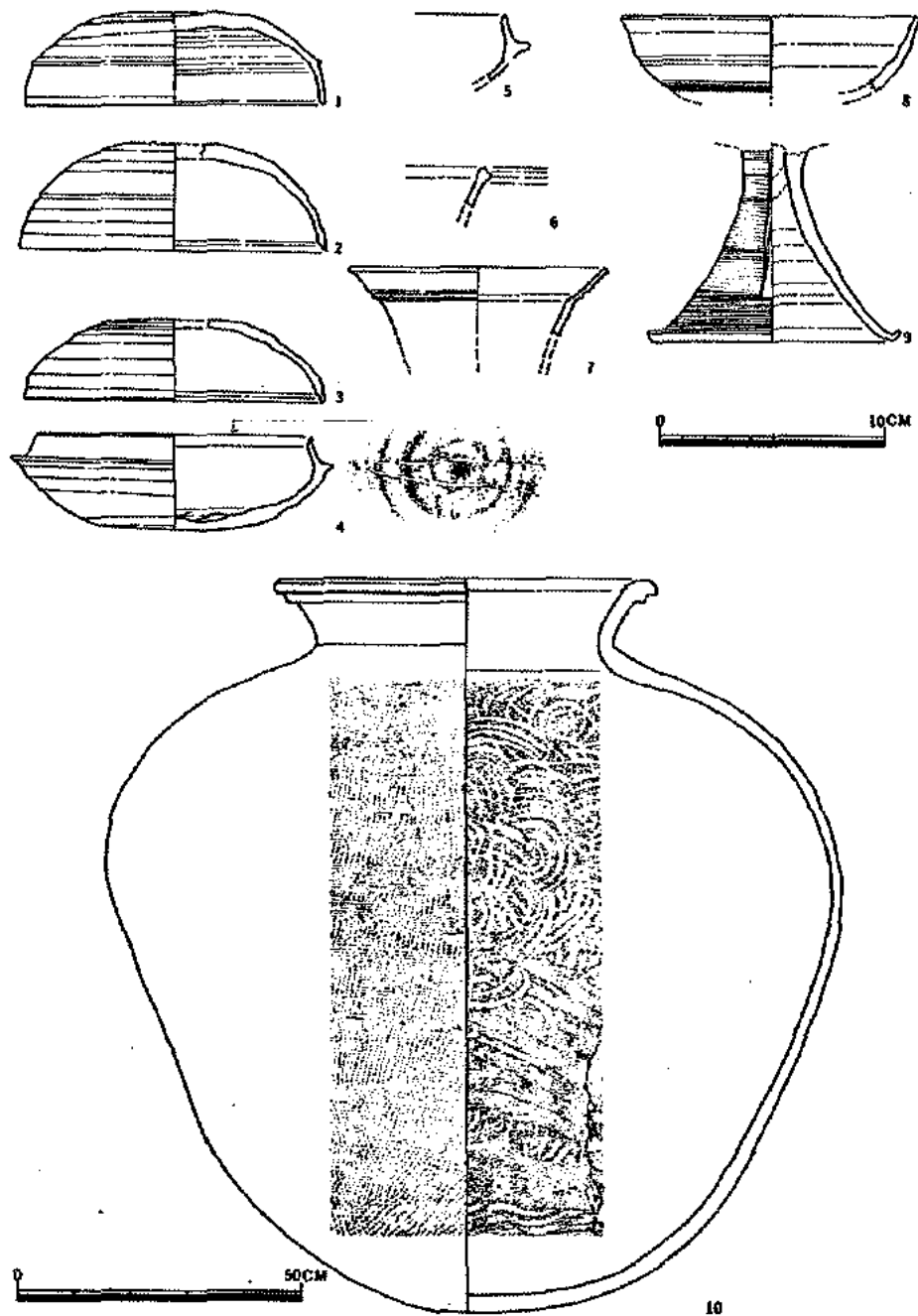
刀子(9～12) 12は、鹿角装の柄部破片である。現存長30mm、幅17mm、厚さ16mmを測る。この鹿角柄部に9×10mmの孔を掘り、これに茎を嵌め込んでいる。現存重量2.6gを量る。9～11は、すべて刀身の破片である。身幅12mmと15mmのもの、現存長15mm～45mmのもの、背幅3mmを測るものがある。現重量は、9～11それぞれ、1.7g、2.0g、10.0gを量る。

鉄鏃(13～27) 13・14は、平根式の鏃である。13は闊部を有し、14は闊部が無い。鏃身頭部については、いずれも欠失しており明確ではないが、方頭あるいは圭頭形になるものと思われる。15～27は、いずれも長頸鏃に類するものと思われる。15は完形のもので、全長17cmを測り、篋被の闊部はやや台形状をなす。鏃身頭部は、鑿箭形で先端に刃部を有す。重量は19.0gを量る。16は、鏃身頭部三角形で、片丸造りのものである。17～19は、柳葉形片丸造りのものである。

須恵器(第10回)【表2】

杯蓋(1～3) 杯蓋は、大きく2類に分けられる。1は、I類に属するもので、天井部と口縁部の境にかるい稜を有し、全体に角張った感を受ける。2・3は、II類に属するもので、天井部から口縁部の境が明瞭ではなく、全体に丸い感を受ける。口径は、1～3で、それぞれ13.5cm、13.8cm、13.4cmを測る。器高は、それぞれ4.2cm、4.9cm、3.7cmを測る。

杯身(4・5) 4は、底から丸みをもって外上方に立ち上り、水平の受部となる。受部



第10图 武九皆真庵遗址第2号出土文物实测图Ⅱ (1/3)

No.	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	立上高 器高 (cm)	受部径 器高 (cm)	口縁 径	色 質	地 上
1	杯 皿	13.5	4.2	—	—	左	外→黄灰色 (暗灰緑斑) 内→黄灰色	3mm程度の長石砂、0.5mm程度の長石砂を含む(やや粗)
2	+	13.8	1.9	—	—	右	外→黄褐色 内→黄褐色	0.5mm程度の長石砂、及び黒雲母砂を含む
3	+	13.4	3.7	—	—	右	外→黄褐色 内→黄褐色	黄褐色と灰色を呈す断面で黄褐色の長石砂を含む
4	杯 皿	12.4	4.3	1.2	14.5	左	外→黄褐色 (緑斑) 内→黄褐色	黄褐色の長石砂を含む
5	+	—	—	1.2	—	—	外→黄褐色 内→黄褐色	黒砂を含む
6	瓶	—	—	—	—	—	外→黄褐色 内→黄褐色	0.5mm程度の長石砂を含む
7	碗	11.4	—	—	—	—	外→黄褐色 (黄緑斑) 内→黄褐色	砂粒をほとんど含まない、特殊なもの
8	高 杯	13.0	—	—	—	—	外→黄褐色 内→黄褐色 (暗灰緑斑)	黒砂を含む
9	+	—	—	8.7	10.6	右	外→黄褐色 (黄緑斑) 内→黄褐色	黄褐色の長石砂、及び黒雲母砂を含む
10	甕	24.8	44.0	—	—	—	外→黄褐色 (黄緑斑) 内→黄褐色	やや粗の黒い砂粒を含む

表2 武丸菅原遺跡第2号墳出土遺物計測表(須恵器)

※ Noは、挿図第10図と同様のものである。

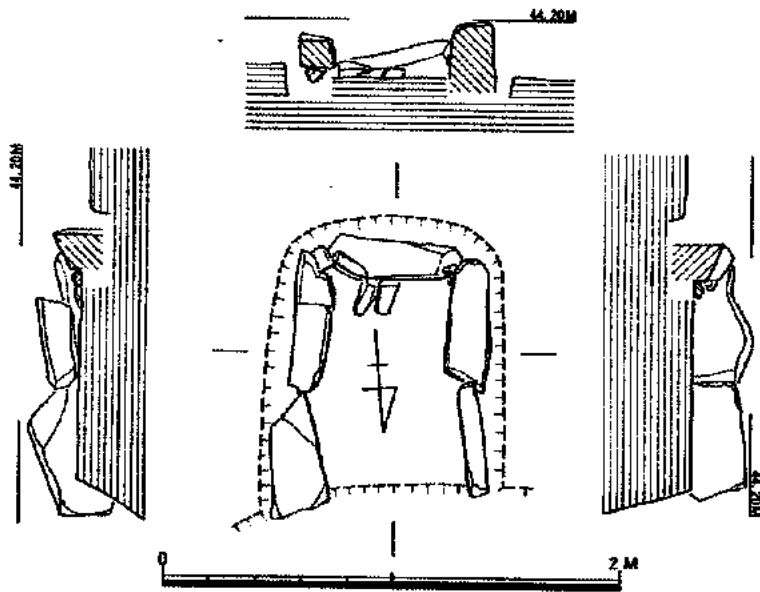
端は、尖りぎみに丸くおさめている。口縁は、内傾しつつ立ち上り、口縁端で、やや外反しつつ直立する。底部は、尖りぎみに丸くおさめている。底部内面には、「||」のヘラ記号を有する。法量は、口径12.4cm、器高4.3cm、受部径14.5cm、立上高1.2cmを測る。5は、受部から口縁部にかけての細片であるが、この外観から4に近いものと思われる。

瓶(6) 6は、口縁部の細片である。提瓶か平瓶のものと思われるが、明確ではない。

碗(7) 7は、口縁部の破片である。直線的に外上方へ立ち上る頸部からいったん屈曲して、さらに外上方へ開く口縁部となる。口縁端部は、シャープで平坦に仕上げられる。身幅は薄く焼成も堅牢である。

高杯(8・9) 8・9は、それぞれ杯部および脚部の破片である。8は杯底部を欠失し、9は脚上端を欠失している。いずれも胎土が微粒の砂を含んでおり、色調にも似かよったところがある。また、調整でカキ目を使用しており、この原体が似かよったものであることからこの2点は、同一個体の可能性をもっている。

壺(10) 10は、体部に比して頸部の短いものである。口縁下に1条の粘土帯を貼り付け頸部との境は明瞭である。口頸部は、横ナデ調整で、肩部から体部下半まで、縦方向の平行叩きの後カキ目調整を施している。法量は、口径21.8cm、器高44.0cm、体部最大径43.2cmを測る。



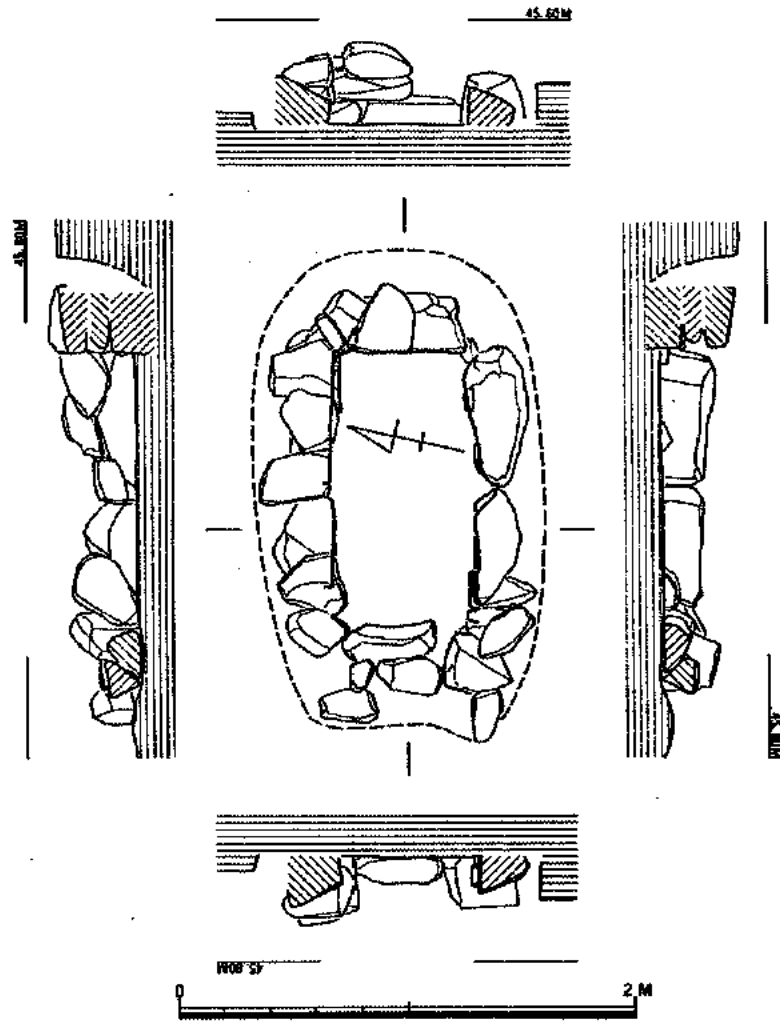
第11図 武丸峯真庵遺跡第3号墳主体部実測図(1/30)

3. 第3号墳

(1) 遺構

現状および配置(第3・4図) 当古墳は、調査区の西端、第2号墳の西10m程のところに位置しており、土砂採取工事によってできた崖面に露頭した状況で検出された。当古墳上部は、後世に墓所として利用されており、墳丘や石室の上部構造を欠失している。

主体部（第11図） 当古墳の主体部は、主軸をN-5°-E方向にとる石室である。この石室は、壊滅的な状態で、奥壁腰石が1石、両壁側にそれぞれ2石の腰石が残存しているのみであった。



第12図 武丸皆真庵遺跡第4号墳主体部実測図（1/30）

4. 第4号墳

(1) 遺構

現状および配置

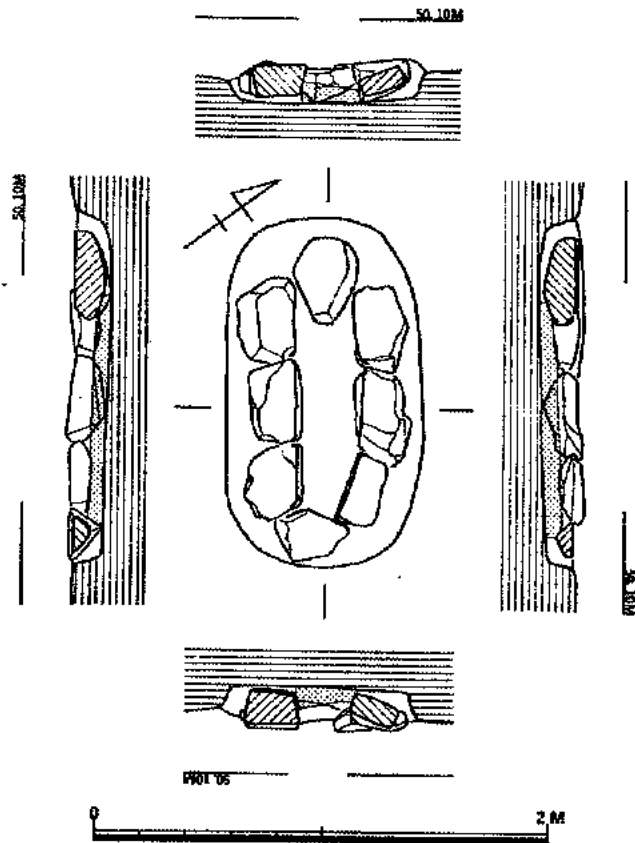
(第3・4図)

当古墳は、調査区西側の南部、第2号墳の南に位置している。現況は、墓所として利用された跡をとどめるだけで、古墳の有無を確認できなかった。

主体部 (第12図)

当古墳の主体部は、主軸をN-77°-E方向にとる単室の横穴式石室である。この石室は、無袖の「コ」字状平面プランを有するもので、主軸方向で1.24m、幅0.6mを測る。腰石は、奥壁に1石、両側壁に各2石づつを配している。この上面に雑な塊

石積みをおこない石室を構築している。当古墳の構造をみると、第3号墳の石室構造も当古墳のものに類似しているように思われる。



第13図 武九皆真塚遺跡第5号墳主体部実測図 (1/30)

5. 第5号墳

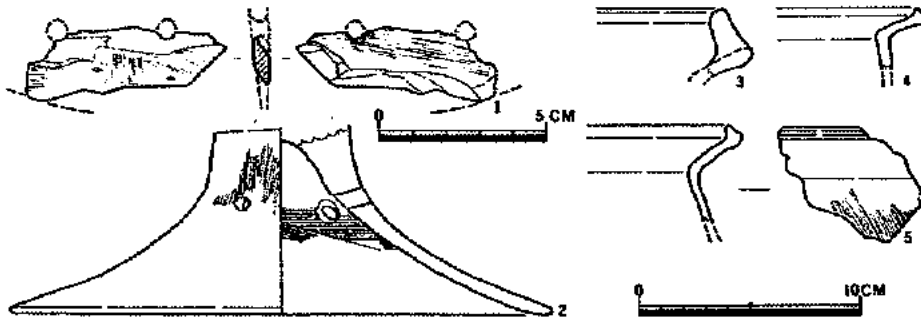
(1) 遺構

現状および配置 (第3・4図)

当古墳は、調査区東側の北端、第1号墳の北6m程のと

ころに位置している。現況では、山林であり、古墳の有無は確認できない程に削平を受け、古墳の上部構造を欠失していた。

主体部（第13図） 当古墳の主体部は、主軸をN-53°-W方向にとる石棺である。この石棺は、西壁の棺材が倒れているが、主軸方向で1.1m、幅0.36mを測る。腰石は、側壁に各3石、両小口に1石を置いている。天井石は、すでに欠失している。



第14図 武丸皆真庵遺跡弥生時代遺物実測図（石器1/2・土器1/3）

II. 弥生時代の調査

第2号墳地山整形面を検出する際に、弥生式土器等が検出できる包含層を発見した。この包含層は、遺構の形を呈さず、ただ面的な広がりをみせるだけのもので、第2号墳北西の崖で消えるものであった。第2号墳を構築する際に、何等かの遺構が存在した可能性はあるが、現状では、不明確である。

(1) 出土遺物（第14図）

石器（1） これは、石庖丁の破片である。色調は、黄褐色を呈す。穿孔は、両側穿孔で、背部と平行に施されたものと思われる。刃部は、外彎型のもので、片面研ぎ出しである。石材は、真岩を使用しているものと思われる。

土器（2～5） 2は、杯部を欠失する脚部だけの破片である。脚高に比して脚底径が2倍程あるもので、脚柱部からなだらかに並び脚礎となる。脚柱部には、5ヶ所の穿孔があり、外から内への穿孔である。また、器壁の調整は、脚柱部外面で縦方向の刷毛目、内面で横方向の刷毛目調整を施している。裾部は、内外面共に横ナデ調整を施している。法量は、脚底径23

.8cm、脚高8.2cmを測る。3は、複合口縁を持つ壺の破片である。4・5は、甕の破片で、やや内傾して立ち上がる体部から「く」字に屈曲して口縁部となる。口縁端部は、断面三角形を呈するようにつまみ上げられており、口唇部にかかるいへこみを有する。器壁の調整は、外面で縦方向の刷毛目調整を施している。

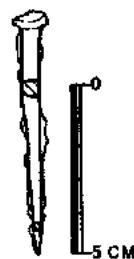
Ⅲ. 中世の調査

第2号墳の玄室内埋土を除去中に大量の土器群を検出した。これは、奥壁の腰石上部面と同じ高さを接地面とし、奥壁中央部に、長さ50cm、幅50cm程の拡がりを持ち、土器を積み重ねた状況であった。この土器群と共に、鉄製の釘が検出されており、この第2号墳玄室内に、中世墓が造られていたことを明確にした。しかし、調査中の玄室天井部の崩落等により、遺構の実測はできなかった。

(1) 出土遺物

鉄器 (第15図)

釘 (第15図) 断面が四角形を呈するものであり、上部幅6mm、下部幅2mmを測る四角錐形である。上端部は、打撃によってできた平坦面が認められ、下端部は、錐状をなす。全長72mmを測る。



第15図 武丸皆真庵遺跡
中世墓出土遺物
実測図I
(1/2)

土器 (第16・17図)

杯 (第16図) 1~22まで、すべて土師器である。これらの杯は、口径10.2cm~12.0cm、器高2.5cm~3.5cm、底径6.1cm~7.6cmの範囲内に納まる法量を測る。これらを、口径100に対する器高の比率 (以下、口径・器高比という) によって分類すると、3種類に分けることができる。また、口径・器高比によって分類されたものを、さらに、口径100に対する底径の比率 (以下、口径・底径比) によって細分することができる。

I類 (10・12・14・17・20・21) この類は、口径・器高比が、21.7~23.9間に納まるものである。このうち、口径・底径比が65.0をこえるものをa類、60.0付近の値を示すものをb類とする。

II類 (1・3~7・9・11・15・18・19・22) この類は、口径・器高比が、25.0~28.4間に納まるものである。このうち、口径・底径比が60.0をこえるものをa類、60.0以下のもの

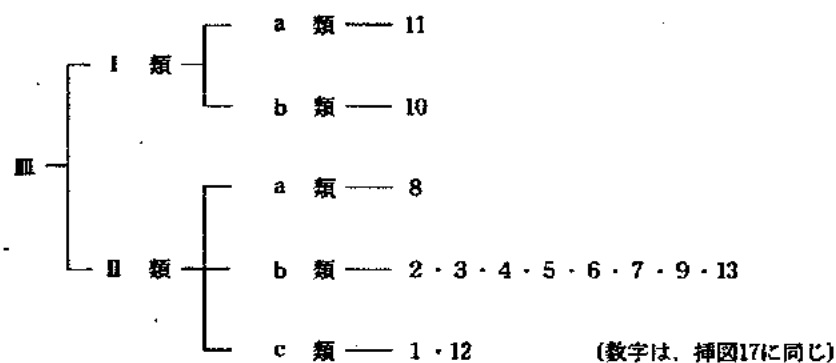
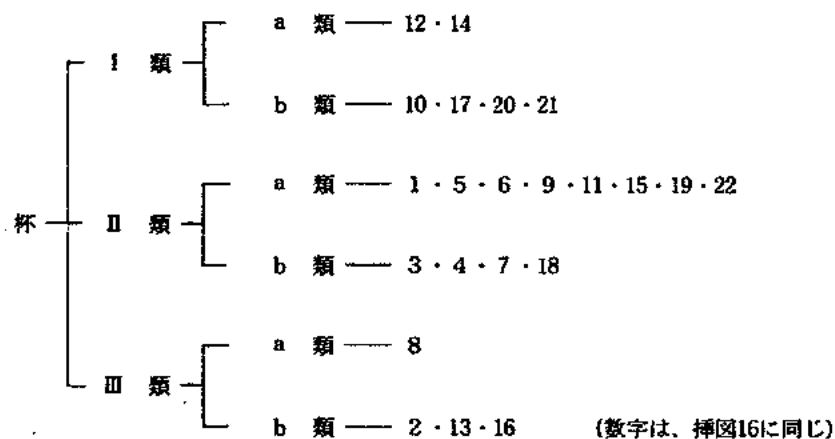
をb類とする。

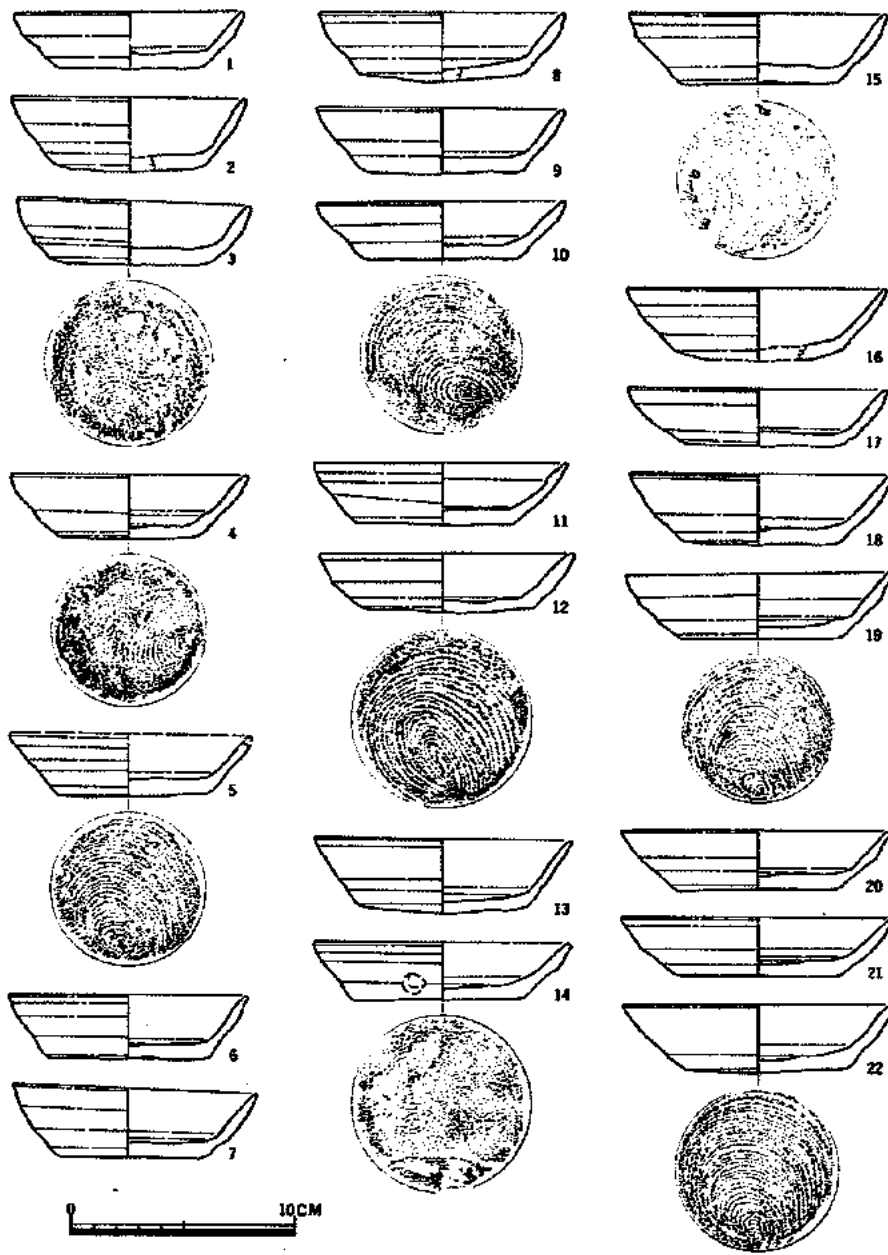
Ⅲ類(2・8・13・16) この類は、口径・器高比が、29.1~33.3間に納まるものである。このうち、口径・底径比が65.0をこえるものをa類、65.0以下のものをb類とする。

Ⅳ(第17図) 1~13まで、すべて土師器である。これらの皿は、口径6.4cm~7.6cm、器高1.0cm~1.6cm、底径4.0cm~5.6cmの範囲内に納まる法量を測る。これらを、杯同様に分類すると、2種類に分けることができる。

I類(10・11) この類は、口径・器高比が、14.5・15.2の値を示すものである。このうち、口径・底径比が60.6のものをa類、71.0のものをb類とする。

II類(1~7・9・12・13) この類は、口径・器高比が、19.4~21.9間に納まるものである。このうち、口径・底径比が60.8のものをa類、65.0~71.2間のものをb類、74.7をこえるものをc類とする。





第16图 武丸皆真庵遺跡中世墓出土遺物実測図Ⅱ (1/3)

No	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	A (%)	B (%)	正器切り出し		内底ナ 子有無	底状圧 痕有無	取 上	分類
						へら	木				
1	10.2	2.6	6.4	62.7	25.5	—	○	○	○	0.5mm以下の長石	II a
2	10.5	3.5	6.8	64.8	33.3	—	○	○	○	微砂粒	III b
3	10.4	2.9	6.1	58.7	27.9	—	○	—	—	微砂粒	II b
4	10.5	2.9	6.1	58.1	27.6	—	○	○	○	0.5mm以下の長石・金雲母	III b
5	10.7	2.8	6.7	62.6	26.2	—	○	○	○	微粒の長石・金雲母	II a
6	10.6	2.9	6.2	63.2	27.4	—	○	○	○	微粒の長石・金雲母	II a
7	10.9	3.1	6.1	56.0	28.4	—	○	—	—	微粒の長石・石英	II b
8	11.0	3.2	7.4	67.3	29.1	—	○	○	○	0.5mm以下の長石	III a
9	10.9	3.0	6.9	63.3	27.5	—	○	○	○	微砂粒	III a
10	10.9	2.6	6.7	61.5	23.9	—	○	○	○	0.5mm以下の長石	I b
11	11.2	2.8	6.9	61.6	25.0	—	○	—	○	0.5mm以下の長石	III a
12	11.2	2.7	7.6	67.9	24.1	—	○	○	○	0.5mm以下の長石・金雲母	I a
13	11.4	3.4	7.4	64.9	29.8	○		○	○	微粒の長石	III b
14	11.3	2.5	7.5	66.4	22.1	—	○	○	○	0.5mm程度の長石・雲母	I a
15	11.3	3.2	6.9	61.1	28.3	—	○	—	—	0.5mm以下の微砂粒	II a
16	11.5	3.4	7.4	64.3	29.6	—	○	○	○	微粒の長石	III b
17	11.4	2.5	6.8	59.6	21.9	—	○	○	○	0.5mm程度の長石	I b
18	11.6	3.2	6.8	58.6	27.6	—	○	○	○	0.5mm以下の長石	II b
19	11.6	2.9	7.2	62.1	25.0	—	○	○	○	微粒の長石	III a
20	11.8	2.7	7.0	59.3	22.9	—	○	—	—	微砂粒	I b
21	12.0	2.6	7.2	60.0	21.7	—	○	○	○	微粒の長石・金雲母	I b
22	11.8	3.1	7.2	61.0	26.3	—	○	—	—	微粒の長石1mmの金雲母	II a

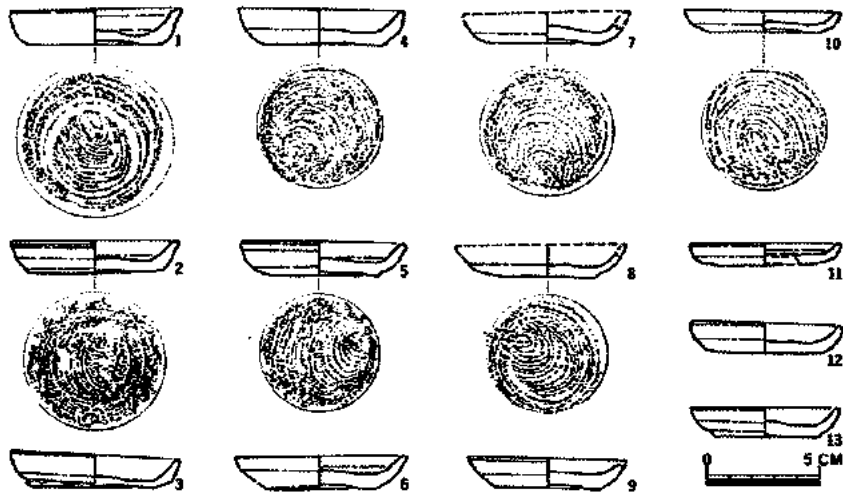
表3 武丸皆真庵遺跡中世墓出土遺物計測表(杯)

※ Noは、挿図第16図と同様のものである。

A=口径100に対する底径の比率(表4同)

B=口径100に対する器高の比率(%)

分類 I・II・IIIは、本文に同じ(%)

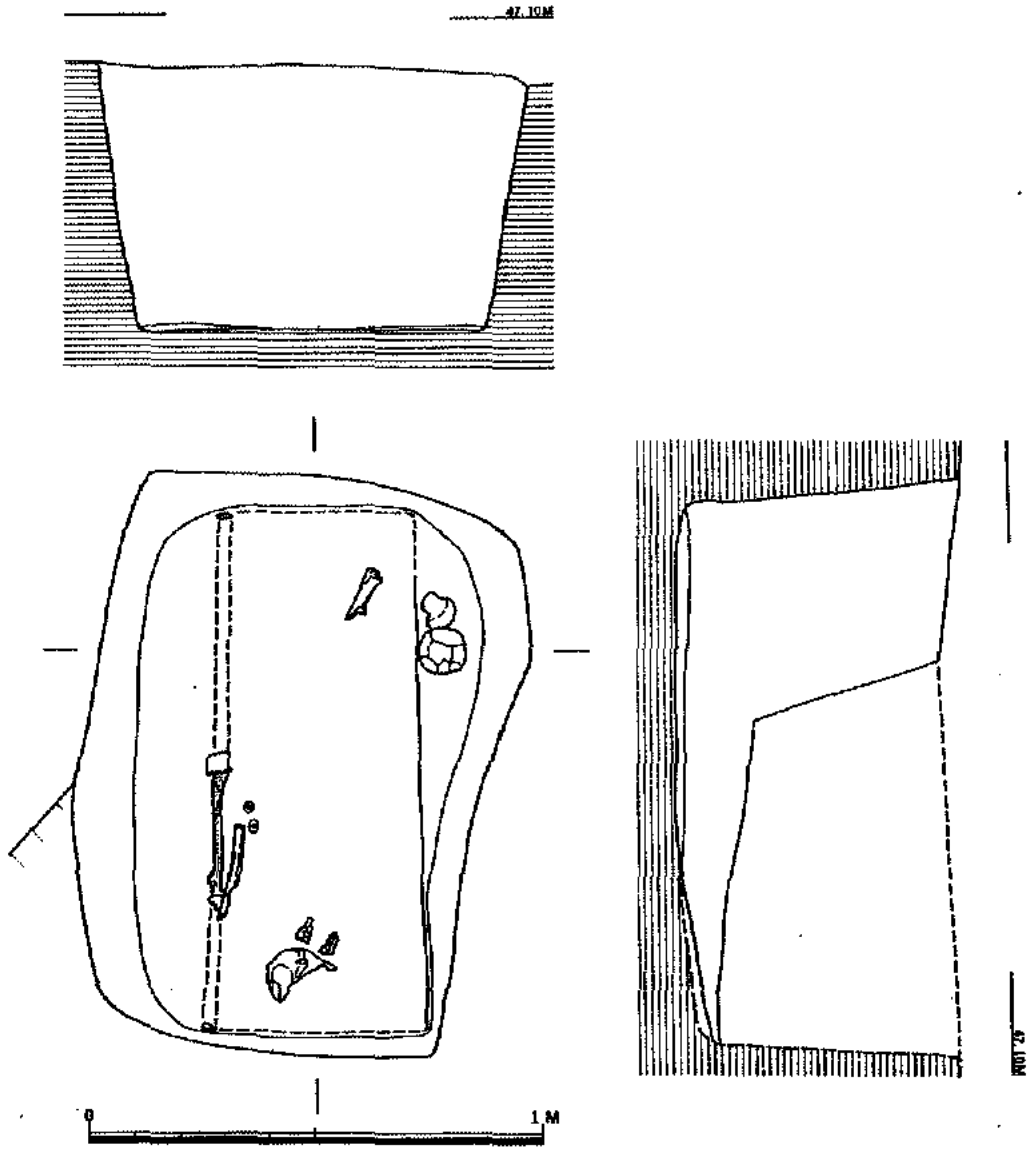


第17図 武丸皆真庵遺跡中世墓出土遺物実測図Ⅲ (1/3)

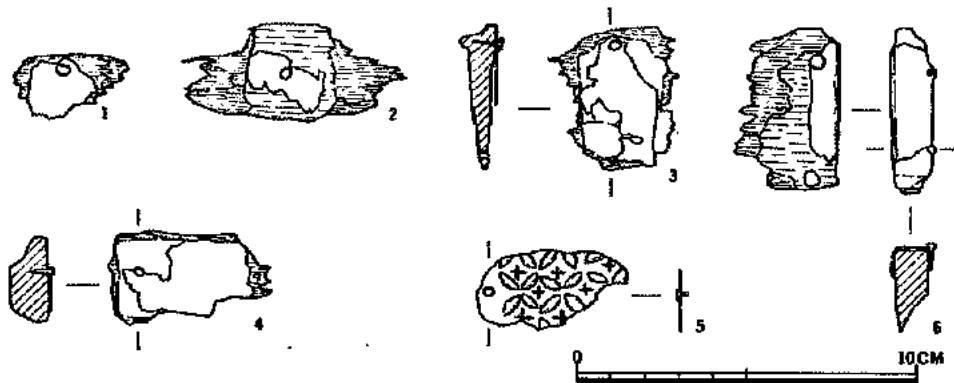
No	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	A (用数)	B (用数)	底部切り出し		内底ナ デ有無	板状圧 痕有無	土	分類
						ヘラ	糸				
1	7.5	1.5	5.6	73.7	20.0	—	○	—	—	0.5 mm以下の長石	II c
2	7.4	1.5	5.0	67.6	20.3	—	○	—	—	黄緑の長石・黒雲母	II b
3	7.4	1.5	5.2	70.3	20.3	—	○	—	—	黄緑の長石・金雲母	II b
4	7.3	1.6	5.2	71.2	21.9	—	○	○	○	長石・石英・黒雲母	II b
5	7.1	1.5	4.7	66.2	21.1	—	○	○	○	黄緑の長石・石英	II b
6	7.6	1.5	5.0	65.8	19.7	—	○	○	○	0.5 mm以下の長石・金雲母	II b
7	7.2	1.4	4.7	65.3	19.4	—	○	—	—	0.5 mm以下の長石・金雲母	II b
8	7.4	1.5	4.5	60.8	20.3	—	○	○	○	黄緑の長石・石英	II a
9	6.8	1.4	4.8	67.6	20.6	—	○	—	—	黄緑の長石・石英	II b
10	6.9	1.0	4.9	71.0	14.5	—	○	○	○	黄緑の長石・石英	I b
11	6.6	1.0	4.0	60.6	15.2	—	○	—	—	黄緑の長石・石英	I a
12	6.6	1.4	5.3	80.3	21.2	—	○	○	○	黄緑の長石・石英	II c
13	6.4	1.3	4.5	70.3	20.3	—	○	—	—	黄緑の長石・石英	II b

表4 武丸皆真庵遺跡中世墓出土遺物計測表 (Ⅲ)

※ Noは、挿図第17図と同様のものである。



第18圖 武丸皆真庵遺跡近世木棺墓遺構実測図 (1/15)



第19図 武丸皆真庵遺跡近世木棺墓出土棺飾り実測図(1/2)

IV. 近世の調査

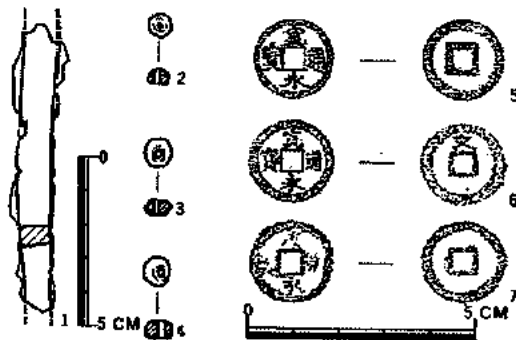
近世の木棺墓1基を検出した。当墓は、第2号墳の墓壇南隅を切り、同古墳の主軸と斜行するような形で存在している。

(1) 遺構(第18図)

当木棺墓は、主軸をN-8°-E方向にとるものである。墓壇は、主軸方向で1.29m、幅0.91m、深さ0.63mを測る長方形プランを呈する。棺は、白木材で、銅製の材に花卉文様を打ち出した棺飾りをつけたものである。外法量は、長さ1.2m程、幅0.45m程を測る。内法量は、棺材が、2.5cm程の厚さをもつことから外法量に5cm程を減じたものであろう。

(2) 出土遺物

当木棺墓内には、頭部を北方向に置く人骨を検出した。この人骨は、遺存状況が良好といえないもので、頭骨・顎骨・四肢骨の一部分を残すものであった。また、棺の東側には、橈骨と



第20図 武丸皆真庵遺跡近世木棺墓出土遺物実測図(1/2)

刷のように寛永通宝3枚とガラス製数珠玉3個を検出した。棺外では、南西隅に、土師器杯と木製杯を検出した。棺埋土からは、棺材と棺飾に混じって、鉄釘を検出した。

棺 材（第19図・第20図）

棺飾り（第19図） これは、木棺の各隅と中央部付近を飾るものである。各隅を飾るものは、断面「L」字形を呈するもので、長さ7mm、上端部径3mm程の釘をもって、板に留めている。材質は銅で、打ち出しによる文様を刻む。文様は、4枚の細長い大型の花弁を「X」字に組み、これを縦横に配し、この隙間に、4枚の細長い小型の花弁を「十」字に組み合せたものを配するものである。

鉄釘（第20図1） これは、長さ8.5cm、幅8mm程を測るもので、上下端部をそれぞれ欠失するものである。この法量から、棺材を留め合わせる謎のようなものに使われたものと思われる。

装身具（第20図）

数珠玉（2～4） 2～4、すべてガラス製品である。径5mm～7mm、長さ3mm程の法量を示すもので、半透明ないし黄色みをおびる丸玉である。

貨 幣（第20図）

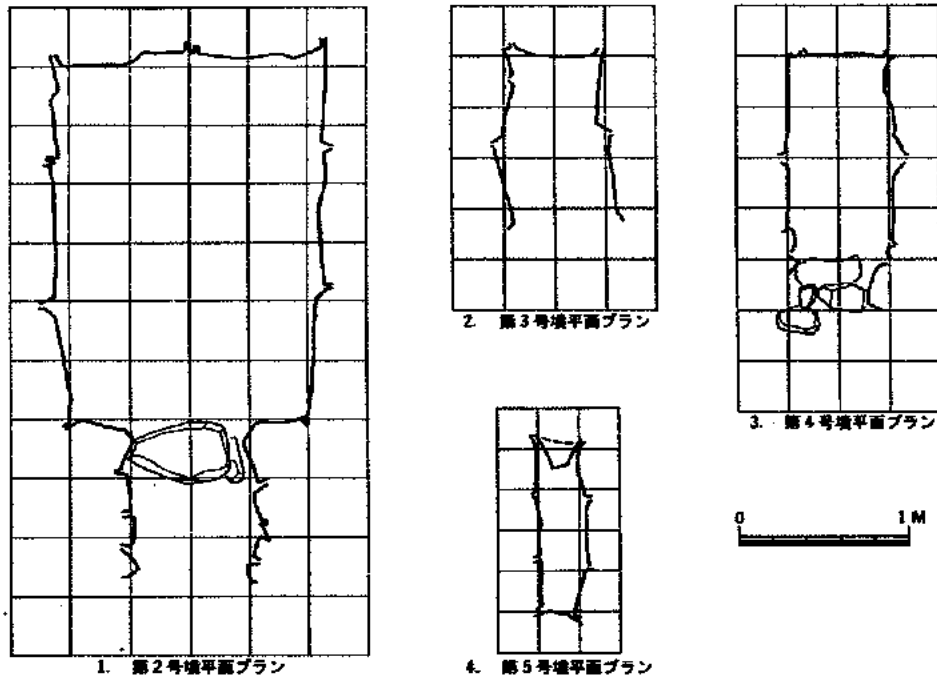
銅錢（5～7） 5～7は、寛永通宝である。5は、径24mm×25mmを測る。表面に「寛永通宝」銘が刻まれ、裏面は無銘である。6は、径25mm×26mmを測る。表面に「寛永通宝」銘が刻まれ、裏面は「天」銘が刻まれる。7は、径25mm×25mmを測る。表裏面銘は、5に同様である。

第3章 まとめ

第1章・第2章は、武丸皆真庵遺跡の調査経過と調査で得た知見である。調査方法については、自己批判する点が多く見受けられるが、得た内容は、それにもまして地域史に新しい頁を加えるものであった。

当遺跡からは、5基の古墳、中世・近世墓、弥生式土器包含層が検出された。当調査区の外には、東側や南側丘陵において、さらに7基程の古墳が造営されている。当遺跡の分布する丘陵は、古代から近世という長い時間幅の中で、墓地を主体とするものであった。この章では、これらの遺構について、築造年代や占地等をのべてまとめたい。

古墳 第1号墳～第5号墳までを検出している。このうち、主体部を欠く第1号墳を除く第2～5号墳をみると、3種類に分類できる。Ⅰ類は、第5号墳であり、主体部が石棺のものである。Ⅱ類は、第2号墳であり、主体部が横穴式石室のものである。Ⅲ類は、第3・4号墳



第21図 武丸皆真庵遺跡平面プラン方眼図

であり、主体部が小型の横穴式石室のものである。このⅠ～Ⅲ類について、築造年代をみると、Ⅱ類においては、土器等の共伴遺物が存在しており、築造年代をつかみやすいが、Ⅰ・Ⅲ類のように、遺物を伴わないものについては、築造年代をつかみ難い。そこで、Ⅰ～Ⅲ類の平面プランに方眼（第21図）を重ねることによって、築造年代を考えてみたい。まず、出土遺物によって、年代観の得られるⅡ類について考えてみよう。この類は、第2号墳であり、これから出土した土器は、須恵器の編年で、ⅢA～ⅢB期に平行すると考えられる。^①このことから、第2号墳は、6世紀第4四半世紀に造営されたものと考えられる。また、方眼操作によると、1マスが35cmの方眼を重ねたとき、玄室長6マス・玄室幅4マス、玄門長1マス・玄門幅2マス、前庭長2マス・前庭幅2マスと綺麗に納まる。玄室高においても、復元ではあるが、6マスで納まる。この35cmの方眼は、晋尺に後出する高麗尺の1尺にあたり、その導入は、6世紀中頃から後半にかけてのものという。このことから、第2号墳は、6世紀第4四半世紀に造営されたものと考えられ、ここに、土器による年代観と石室平面プランの方眼操作による年代観の一致をみるものである。では、Ⅰ・Ⅲ類について、方眼操作を用いてみよう。Ⅰ類は、1マスが24cmの方眼で、主軸方向に4マス・幅1マスと綺麗に納まる。また、Ⅲ類は、1マスが30cmの方眼で、玄室長4マス・玄室幅2マス、玄門長1マス・玄門幅1マスと納まる。ここで、24cmの方眼は、高麗尺に先行する晋尺の1尺にあたる。また、30cmの方眼は、唐尺の1尺にあたり、630年の遣唐使以後に導入されたものである。これらのことから、Ⅰ類は、Ⅱ類に先行する年代が得られ、Ⅲ類は、7世紀第2四半世紀のものと考えられる。これで、当調査区内の古墳築造を考えると、まず、主体部に石材を使用した可能性が薄い第1号墳が、丘陵上位の尾根線上に占地し、次にⅠ類に属す第5号墳が、第1号墳の北側に造営される。この後、Ⅱ類に属す第2号墳が、丘陵下位の尾根線からやや北寄りに造営され、最後に、Ⅲ類に属す第3・4号墳が、第2号墳の西方向に造営され、この後、古墳の造営は、絶える。

中世墓 古墳が絶えてから7世紀、第2号墳の天井から1基の木棺墓が造営される。これに伴う大量の土器群を検出し、第2章の中で分類している。このうち、大宰府史跡の今光寺跡腐植土層中の出土土器杯a類と当遺跡出土の杯Ⅱa類が、類似する法量を示す。また、Ⅲにおいても、腐植土層中の出土土器皿b類と当遺跡出土の皿Ⅱc類が、類似する法量を示す。^②このことから、当遺跡出土の土師器は、大宰府史跡今光寺跡腐植土層中のものと平行するものと考えられ、当遺跡の土師器は、14世紀後半～15世紀初頭の年代観が得られるものであろう。

近世木棺墓 当墓からは、銅銭を3枚出土しており、これから年代観を考えてみよう。まず、挿図第20図5は、明暦2年（1656年）、江戸島越所で鑄銭された寛永通宝と類似する法量を示すものである。また、挿図第20図6は、寛永通宝の裏面に「天」の字が刻まれ、寛文8年（1668年）、江戸亀戸所鑄銭のものである。挿図第20図7は、元禄10年（1677年）、江戸亀戸所で鑄銭された寛永通宝と類似する法量を示すものである。^③これらから、当墓の被葬者は、少

なくても、元禄10年まで生存したことは確かである。また、正徳4年(1714年)の寛永通宝が含まれていないことから、この年までは生存していないものと考えられる。これは、当墓が、17世紀後半から18世紀初頭に造営されたことを示す。

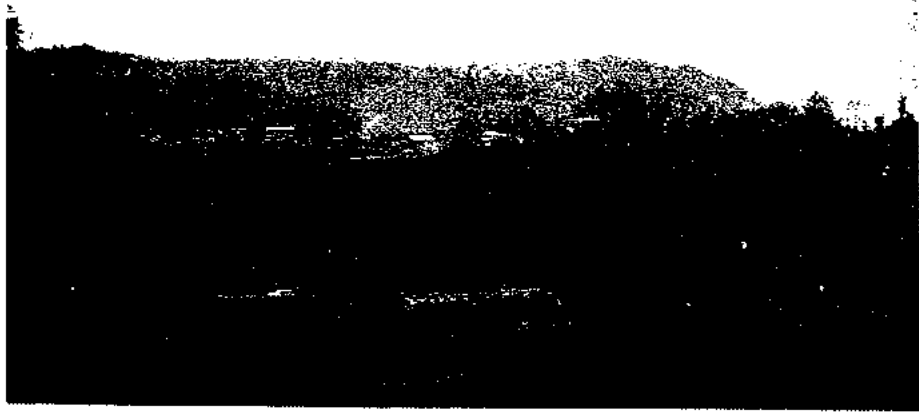
以上のべてきたように、武丸菅真庵遺跡は、古代から近世にかけて、墓地として利用されていたものである。当遺跡で検出された5基の古墳は、武丸地区で最初の古墳調査例となるもので、今後、同地区の資料拡充と他地区との比較検討作業が、当市における課題であろう。

注1 福岡県教育委員会 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財報告』XVII 1977年

注2 九州歴史資料館 『大宰府史跡』 1979年 (森田勉氏による御教示)

注3 田谷博吉 『国史大辞典』3-か-吉川弘文館 1983年

圖 版



1. 武丸菅真庵遺跡調査前遠景



2. 武丸菅真庵遺跡調査前全景



1. 第1号墳調査前全景



2. 第1号墳全景



1. 第2号墳遺存前全景



2. 第2号墳全景



1. 第2号埧堰概况



2. 第2号埧堰概况

图版 5



1. 第2号填石室奥壁



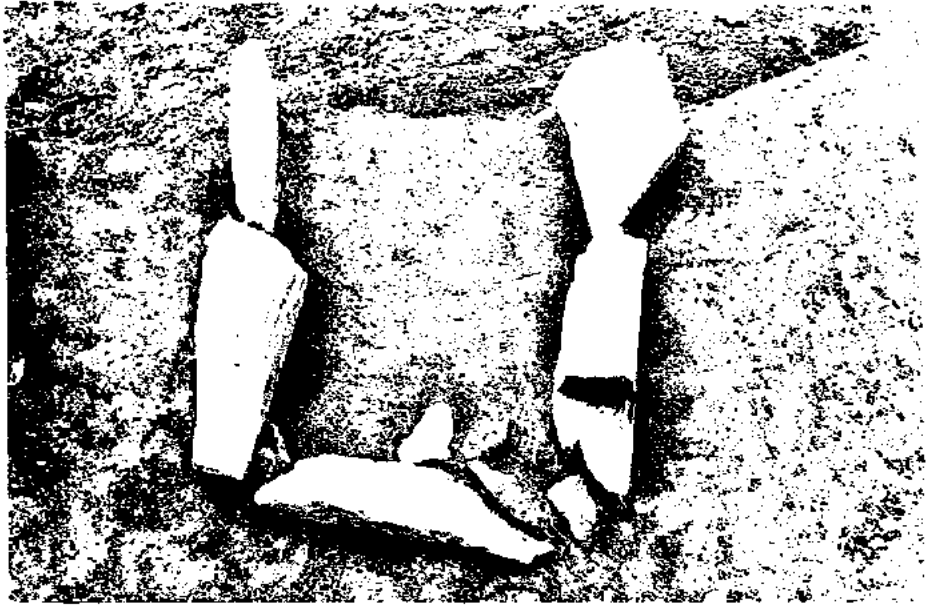
2. 第2号填石室侧壁



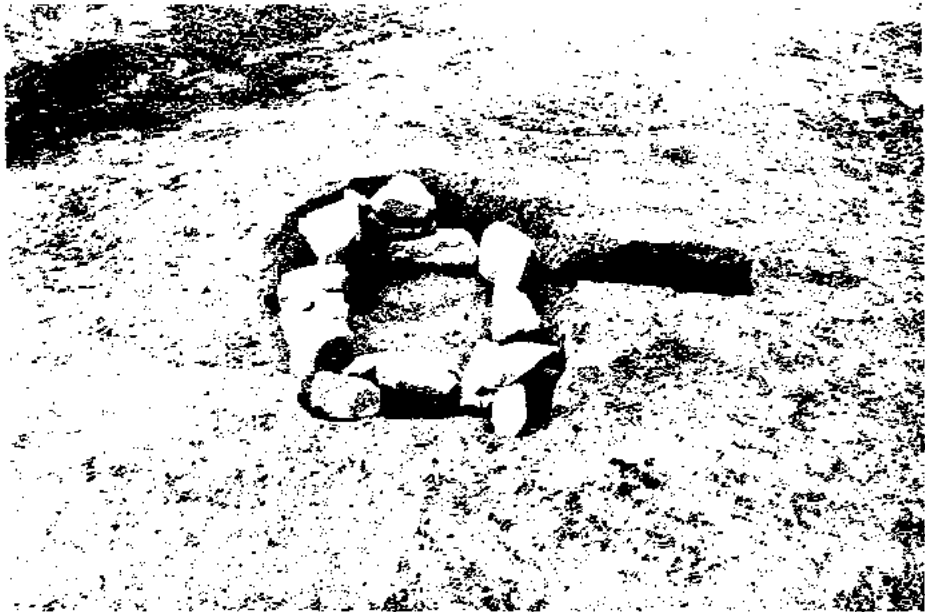
1. 第2号墳石室正面観



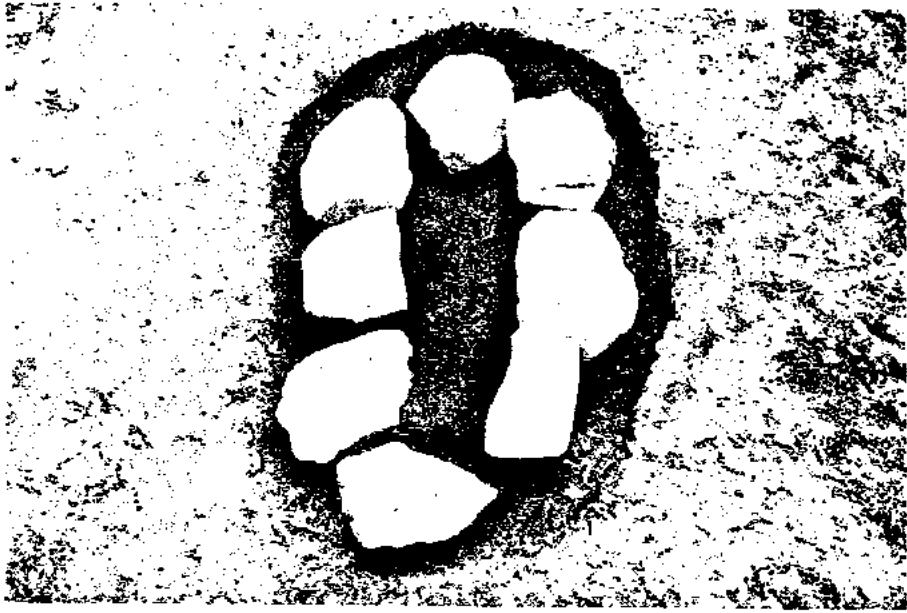
2. 第2号墳石室内から玄門を望む



1. 第3号墳主体部



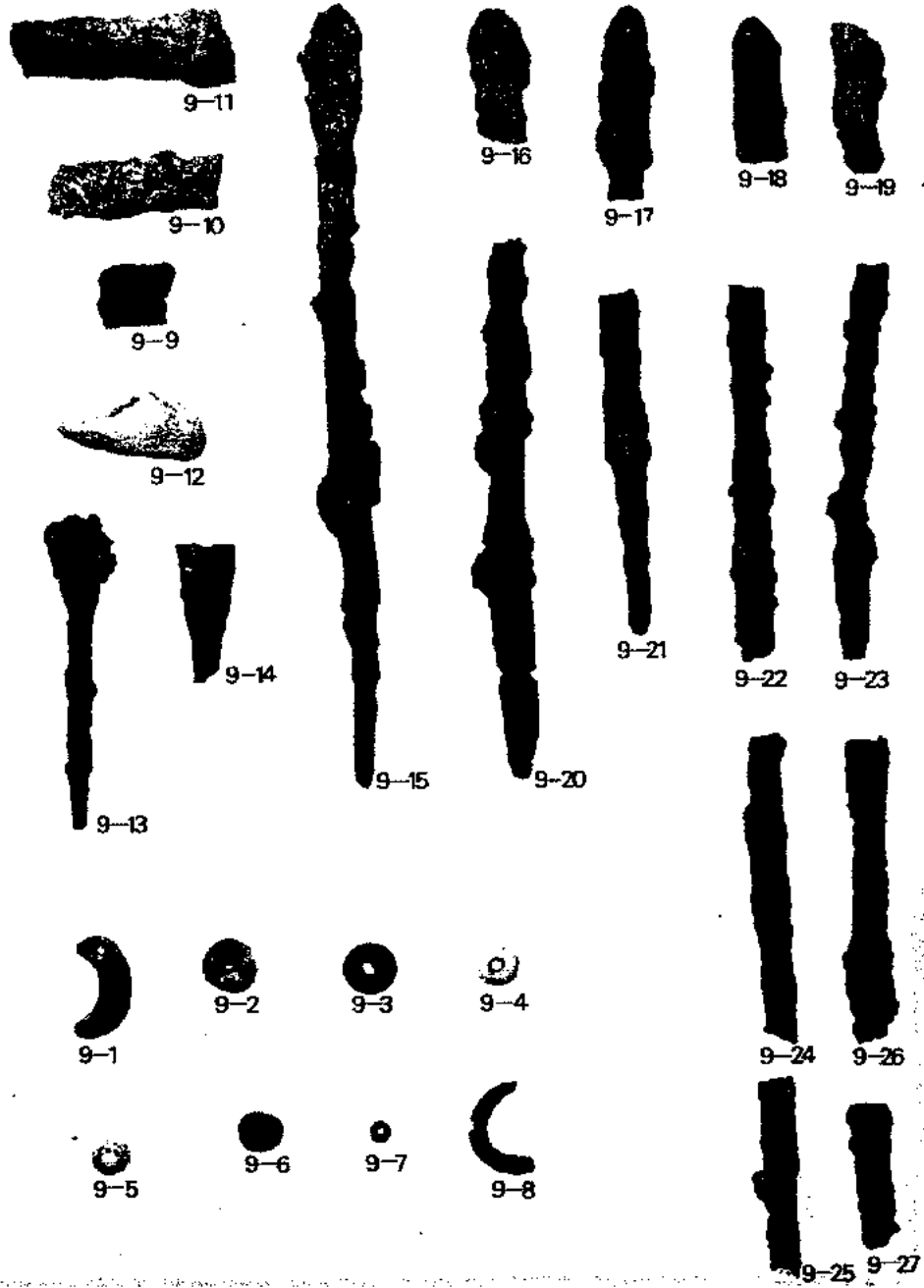
2. 第4号墳主体部



1. 第5号墳主体部



2. 近世木棺墓



第2号墳出土遺物I



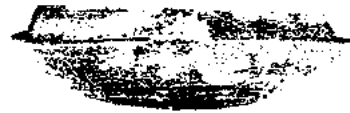
10-1



10-3



10-2



10-4



10-10



14-2

第2号墳出土遺物II



16-1



16-7



16-3



16-8



16-4



16-9



16-5



16-10



16-6



16-11



16-12



16-18



16-13



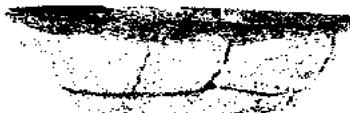
16-19



16-14



16-20



16-15



16-21



16-17



16-22



17-1



17-7



17-2



17-8



17-3



17-9



17-4



17-10



17-5



17-12



17-6



17-13

中世墓出土遺物Ⅲ

宗 像

武 丸 皆 真 庵

宗像市文化財調査報告書 第 15 集

1988年 3 月 31 日

発行 宗像市教育委員会
福岡県宗像市大字東郷995番地

印刷 釜 瀬 印 刷
福岡県宗像市河東